咲まてきえぬ雪かとぞみる　好忠集

花瓣は其數四個ありて十字形をなし、花散りて後、信玄袋の口をしめたる如き、倒心臓狀楔形の小果實を結ぶ。其形古へ官人のさげし袋に似たるとか。

園に生ふる園に生ふる　唐薺はよき菜なり
はれ官人のさぐる袋を　おのれかけたり　催馬樂

尙ほ又其形は三弦の撥の如く若し其二個をとりて相磨すれば微音を發する故に、一名を三味線草或は「ぺんぺんぐさ」ともいふ。

薺はやぺんぺん草となりにけり　行駒の口明とむるなづなかな　柳非
常好

古き世には早春雪間に萠え出でたる嫩苗を摘み、羹などに調じて食膳に供へたれども、今は路傍の雜草と同一視して、誰も顧みるものなく、菜粘盛衰の理も世の推移につれて、かかる卑なき草にまで及べりしこそ淺ましけれ。

御園生のなづなの羹も立にけり　けふの朝菜になにを摘まし　好忠集



雪かうづみ垣根につめる唐薺　拾遺和歌集・良龍
なつさはまゝのほしき君かな
人心あれたる宿の園におふる　紅政卿集
からなづなこそつまゝほしきは

## 考證

薺生薺々故謂之薺、又曰、甘溫無毒利肝和中利五臟根治目痛明目益胃根葉燒灰治赤白痢極效。（本草綱目）

採子用水調搗良久成塊、或作燒餅、或煮粥食味甚粘滑、葉煠作菜或煮作羹皆可。（救荒本草）

催馬樂に唐薺は薺の中に別にあるにや、官人のさぐる袋とは官位によりてかはるなり、ナヅナの實の袋に似たればいへりとあり。又愚案抄にカラナヅナはただ薺なり、とあり。尙ほ又拾遺和歌集顯昭が註にもカラナヅナとは常のナヅナをよむなりとあり。此等諸先輩の考說と歌の意義などかれこれ合せ考ふるに、別にカラナヅナなる一種の植物ありていひしにはあらざること、殆ど疑ひなきが如し。

## なでしこ　瞿麥

又やまとなでしこ・とこなつ・かはらなでしこ
撫子・大和撫子・倭撫子・常夏・河原撫子　（石竹科）

Dianthus superbus, L.

瞿麥は邦俗に撫子とも記して古來我國人の特に愛惜して措かざる所なり。

なでしこが花見る毎に少女らが　　家持
ふまひの匂おもほゆるかな

恋情なの御事や、　大和撫子の花だにも　　伊勢
同じ種とてもろこしの　唐紅に咲く物を

うすくもこくも花は花　情なくこそ候へとよ
時刻うつりてかなふまじ　いそぎ御舟にめされよと

はや纜をとくとくと　呼ぶ子もあれば取とむる
中に留まる父ひとり　たづきもしらず泣居たり　　謠曲・唐船

いつくにもききはすらめど我宿の
大和なでしこ誰にみせまし

かくて愛兒の意味を含ませたること明にして、尚ほ夏の野の繁き草叢の間に咲き出てたる姿も、亦一入しほらしきものなり。



花賣もなき世のものか野撫子　　道彦
撫子に雲のかかりし山路かな　　里山
戯の男か草にやつるるまがきにも
真はそへつなでしこの花　　春海
野邊みれば瞿麥の花咲にけり
わがまつ秋は近づくらしも　　西行物語

莖は細長く高さ一―二尺に達して、莖頂には淡紅色の優しき花を開く。花瓣の廣濶なる部分の緣邊は殆ど總の如くに深裂せるを以て「からなでしこ」とは異れり。開花の時期甚だ長く、春より秋に亙りてかはるがはる咲き匂へるにより、又一名を常夏ともいへり。

のどかにもをもほゆるかな常夏の
久しく匂ふやまとなでしこ　　好忠集

朝なく　なほききまさる色みえて
ちりだにすへぬ常夏の花　　現存六帖・入道前攝政

藥は線狀披針形にして、膨起せる節を擁して相對す。河原などにも多く咲き出づるによりて、又の名を「かはらなでしこ」ともいふ。

根をたえてさざれの上に咲にけり

雨に流れし河原なでしこ

## 考證

家經朝臣、和歌序云鎧愛抽衆草、故曰撫子、艶狀共千年、故曰常夏・ナデシコ・トコナツのけぢめ、此の說詳なるか、後世にては、常夏とだにいへば撫子の一名なりと心得れど、春咲く花の久しく咲くをとこなつに咲くといふこと珍らしからずかし。萬葉集十七に、

たち山にふりおける雪をとこなつに
みれどもあかずかむがらならし

とあるは雪の久しくきえぬをいへり、これをもてもおもふべし。（富士谷御杖著北邊隨筆）

つひに出居をたつれば、ずなはち、ねながらにして富士の常夏の雪を見さげぬ時の人ほめて常夏の大人といへり、これ朝臣の功の三つなり。（光海靈神碑文・加茂眞淵）

撫子、野に自ら生ずるものは花も葉も大なり、俗に之を撫子といふ、川邊に數多ある之なり、是れヤマトナデシコなり、園中に植うるものを石竹といふ、是れカラナデシコなり、今の俗山にあるヤマトナデシコをばナデシコといひ、園に植うる唐撫子をば石竹といひ、ナデシコとはいはず、撫子とは花の形ちひさかにて其愛すべきを以て名く、トコナツとは春より秋まで盛り久しく咲つゞく故に名づくと榮雅抄にいへり。（貝原益軒著大和本草）

撫子・トコナツ・ナデシコ・カハラナデシコ・ヤマトナデシコは山野に多く六―七月花生ず、野生は皆淡紅、山生は稀に紅花のものあり。（小野蘭山著本草啓蒙）

今按ふに古の歌によみしナデシコは皆山野に生るナデシコなり、唐撫子はやゝ後に漢土より渡れるものなるべし、近年又いよいよ數品あり。（鹿持雅澄著萬葉集品物解）

## なんばんきせる　南蠻烟管　又おもひぐさ　和蘭烟草・思草　（列當科）

Aeginetia indidica L.

「なんばんきせる」は禾本科植物中、多く芒の根部に寄生して、怪しき形をなせる、無葉綠の植物なり。而して此植物の着ける部分は、腐蝕せし如くなりて更に生氣なし。蓋し芒は自家の養分を此植物の爲に奪取せらるゝにより、早晩枯死するを免かれざるべし。萬葉集に、

道の邊の尾花が下の思ひ草
今更になぞ物を思はん

と詠みたる思ひ草につきて、古來諸說頗る多けれども、此處に記せる「なんばんきせる」こそ、正しく其物ならんと考へらる。

花莖は土筆の莖に似て、淡黃色或は肉色を呈し、質柔かく、一株より唯一個を生ずることあり、又數個を叢生せることもあり。長さ三—四寸許ありて、七月頃其先端に一花を開く。花は長さ六—七分內外の筒狀花にして、紫色を帶び、莖の頂端に側生してつける樣は、誠に烟管に彷彿たり。花過ぎて後、小さき果實を結ぶ。

## 考證

思ひ草につきては、古來國學者或は歌學者間に諸種の異說多くして、終に歸着する所に迷はしむるのみならず、何れも其論據とする所、甚だ薄弱にして、大に傾聽にあたひすべきもの甚だ稀なり。

千古の歌聖定家卿は龍膽の事なりと主張せられ。九條關白殿は紫苑を思草といふなりと被仰けるとあるは、詞林採葉抄に載する所にして。藻鹽草には女郎花を思草といふ事は、さいいんさいの草づくしに見えたりと出て。藏玉和歌集にも、同じく齊院前栽花譜に見えたりとて、女郎花を思草と記し。骨契沖の萬葉代匠記には、思草はたしかならねど、まづは龍膽の花といふ說につくなりと說かれ。或は又安藤爲章の年山記聞には、御釋に云く思草の事先達の說々あれど、よりどころ確ならざれば信し難し、今按ずるに尾花が下に限らず物の陰に生ひたる陰草をすべて思草といふかと。

實に是をこそこれ眞に異說紛々と稱すべきにて、誠におぼつかなき至りなり。然れども亦むげに悲觀すべきにも及ばずして、聊か吾人の意を强うするに足るべき說もなきにあらず。されば次に之を紹介して此怪物の正體を明かにせんと欲す。

本居宣長翁の曰く、思草といふ草は定かならぬを、一年尾張の名兒屋の田中道麿が許より文のたよりに、今の世にも思草といひてスヽキの中に生ふる小さき草なんあるを、高さ三—四寸あるは五—六寸計にて、秋の末に花咲くを其紫の黑みたるにてうち見たるは菫の花に似てスミレの如く色の香ひなし、花咲く頃は葉はなし、此草スヽキの中ならでは外には生ぜず、花のはしつ方なる所の中に黑大豆ばかりの大きなる實のあるをとりてまけばよく生るなり、されど薄の下ならでははまけども植

れども生ることなし、古への思草も之にやあらん、されどスヽキの中にのみ生るから近き世に事好むものゝおしてそれと名付けたるにもあらんか、といひて、其草の圖をも書て見せにおこせたり、其後に又ある時花の咲きたる頃、一もとほりてスヽキのきりくひどめに竹の筒の中に植ゑて、たゞに其草をもみせにおこせたるをうつしうゑて見けるに、しばしは生つきたるまゝにて有しを、ほどなく冬枯れにける、又の年の春もえや出ると待けるに、終に枯れてスヽキながらに芽も出ずなりにきかし、さるは後に尋ねみれば此わたりの野山なるスヽキの中にもある草にてぞありける、これ古の思草ならんことはしむ實にいとおぼつかなくなむ。

かくも確なる據り所あるものを、などおぼつかなしといはれしにや、誠に不思儀とこそいふべけれ。

前田曙山(前略)曰く此草ナンバンキセル(湖類なれば、其鬼湖と糸湖とに論なく、能く發生すれども、殊に野湖といへる鬼湖の下を可なりとするものゝ如く、誠にカリヤス・カルカヤ等の下に蒔くも決して生ずる事なし、是に於てか、始めて湖と思草とは、兩襲離る可らざるの關係ありて、湖と離れて思草の自活し能はざるを知れば和歌の道の邊の尾花が下の思草なる一首の意は、晩々火を見るが如くに明かなると其に其龍膽に非る事を知るを得べし。

抑も歌學者が尊信する、定家卿の龍膽記なるものは、果して何ぞ、定家卿は誠に和歌の大匠なり、千古の歌聖なり、之を信奉する故なきに非ざるも、其は歌道の上に於てのみ、其植物に於ける智識は、築地の破れを繕ろふむくつけき漢にも劣るべきは論なし、然も植物の智識なきが爲に決して歌聖たるを傷けざるは、鶴が水を渉れども、鴨の如く水を泳ぐ能はざるも、鶴決して鴨より下れりと稱する能はざるとに一なり。

箒と短冊とより重きを持たざる古への長袖者流、なんぞ山野を跋渉して、龍膽と思ひ草とを分たんや、蓋し其分たざるは理なり、後世の其說を信奉して誤りなしとするに至りては、愚の極ならずや。と

蓋し曙山氏の說と余が意見とは、偶然にも全然相一致し、頗る我意を得たるものなれば、余は更に筆を新にして數言を費すの要なく、暫く同氏の高說を借りて局を結ばんと欲す。

## にはとこ　接骨木　又みやつこき　(忍冬科)

Sambucus racemosa, L.

接骨木は各地の野原に自生せる落葉灌木にして、幹の高さは五-六尺より丈餘に伸び、中心に大なる髓を有す。植物學・電氣學などの實驗用に用ひらるゝ接骨木心は、即ちこのものなり。葉は奇數羽狀複葉にして、小葉の葉緣には細かき鋸齒を具へ、長さ二-三寸許ある長楕圓狀披針形なり。三-四月頃、梢の先端に、微細なる白色の花を群がり生ず。雌蕊は黑紫色にして、紅色の果實を結ぶ。幼き芽は摘み採りて食用に供せらる。

考證

本草云接骨木和名美夜都古木。(和名抄)

女貞和名美也都古岐、一名多都乃岐。(本草和名)

爾波等許といふは、美夜都許の訛なることはさらにて、爾波等許木といふべきを、



木といふをも後に略きて呼しこと決し、されば多豆乃木と美夜都許岐とは、一物なること勿論なれば、本草和名美也都古岐の一名を、多都乃岐とせる然ることなり。

(庇持堂證著萬葉集品物解)

## ぬるて　鹽膚木

又ぬてのき　白膠木　(漆樹科)

Rhus semialata, Murr. var. Osbeckii, DC.

「ぬるで」は一に「ふしのき」ともいふ。各地の山野に自生せる落葉喬木にして、幹の高さは二-三丈に達す。葉は奇數羽狀複葉にして、四對乃至六對の小葉よりなり、長さ尺餘の總葉柄の基脚は馬蹄形をなして枝梢に着き、葉柄より化生せる特異の翼を具ふるを以て著し。各小葉は楕圓形にして、先端尖り、葉緣には鋸齒を有し、秋に入ればよく染まりて甚だ麗はし。

散りかかる中に白膠木の紅葉かな　左流

秋深くやう〳〵しぐれ行くままに、四方の山の梢、色深くなりゆき、野邊宿にうつろひゆくなどはいふべくもあらぬを、外山の時雨も、殊にぬらしけ

るにやはるての紅葉のわきて色深きを折りて見れば、枝ざしなどはなつかしからずながら、色の深きも哀れに云々。

古来風體抄・後序

今の世には、紅葉といふ名を、おのがものにぞしたる、すくせいと尊しかし、梔子はめてたけれど、葉のさまうるはしうて、なつかしげなし、ぬるでは品下りにけり、柿の葉の霜より後までちり残りたるぶ、漆もて塗りたらむやうにてり光りて、只二葉ばかり見ゆる、いとめづらかなり。

年々隨筆

花は綠白色にして甚だ小さく、七-八月頃複總狀花序をなして簇生す。果實は小さき球果にして淡紫色を帶び、表面には白き毛を密生す。

堀川百首・兼俊

書見し道祭ぬれどなかりけり
ぬるて交りの伊奈の雉原

五倍子と稱して藥劑又は染料などに使用する黄褐色の粉末は、此植物の葉に一種の昆虫の浸入して、其卵子を容るゝより生ずる數生物にして、多量の單寧酸を含有するを以て有效なり。

## ねず　杜松　又むろのき

Juniperus rigida, S. et Z.

（松杉科）

杜松は山地に自生せるもの多けれども、亦海岸の砂地にもよく生育するものにて、通常幹の高さ二-三丈位に過ぎず。然れども亦時としては是より遙に大木に達することもあり。萬葉集には、

わぎもこがみし鞆浦の天木香樹は
　　當世にあれどみし人ぞなき
はなれそにたてる木ムロノキ鞆浦木うたかたも
　　ひさしきことのすぎにけらしも

の如く專ら海濱に產するものにつきて詠まれたるが、其後の和歌に「むろのき」を詠めるは、主として萬葉の句調に倣ひたるが如し。

鞆浦や波路はるかにこく舟の
　そかひになりぬ磯のむろの木　　現存六帖・伸業
しぐるれど秋の色にはなれそに
　みどりかはらずたてるむろの木　　新撰六帖・行家
あづさ弓いるべにたてるむろの木の
　とことしはうつともの浦波　　新撰六帖・知家

樹の姿は杉によく似たる所あれども、針葉は三-四個づゝ節部に輪生してつき、杉の

葉よりも稍や長し。若し此樹の枝を鼠の出づる穴にさし入れ置く時は、鼠は是を嫌ひて出でぬより、俗間に「ねずみさし」或は「ねずさし」などといふ。雌雄株を異にして小花を開き、豆大の果實は熟して黑色となる。

考證

田中道萬呂がいへりしは、萬葉の歌に詠みたる室の木と云ふものは、今もいづこにも多くあるものなり。美濃・不破郡・多藝郡などにて、ヒムロともムロスギともいひ、伊勢の員辨郡・桑名郡のあたりにて、タチムロ・ハヒムロと云ひ、尾張の羽栗郡にてネズムロともペロノキともいへり。すべて山に多き木にて、地にはふと高くたつと二種ありて、はふ方には大木はなきを、立る方には大なるもの多し、二種共に實多くなるなり。（本居宣長著玉勝間）

爾雅註曰、櫚一名河柳和名無呂。（和名抄）

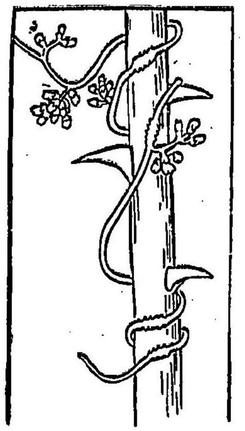
櫚桿同諸貞反楊類、加波女奈支、又牟呂乃木。（新撰字鏡）

赤櫚一名櫚乳、和名牟呂乃岐。（和名本草）

などとあるによりて、萬葉のムロノキを櫚柳に充つるものあれど、櫚柳は小野闌山もいへりし如く、寛保年中に渡種始めて、渡來せしものにて、其種類も甚だ少なく、且年代の關係上にも大なる相違あれば、其說の否なることは自ら明なり。

## ねなしかづら　兎絲子　又ねなしぐさ　根無草　（旋花科）

Cuscuta japonica, Chois. var. thyrsoides, Engelm.



兎絲子は寄生植物にして、始めは地上に生ずれども、漸次他の草木に纏ひ附き、該植物體より滋養分を奪ひ取りて生長す。蔓は黃白色にして所々より枝及び寄生根を分ち、尋常葉は一つも是を有せず。夏の終りに至り小さき花叢を生じ、鱗片狀の小葉と、紅白色の小花とを綴る。花は太短かき花梗につき、筒狀花冠の緣邊は淺く五裂し、黃黑色の小さき種子を結ぶ。此の種子地上に落つる時は、發芽して幼植物となる。糸の如く細長き小植物に過ぎざれども、寄生主の何れの所を問はず、寄生根を挿入して滋養分を奪取するにより、終に寄生主の倒るるもの多し。

明日知らぬ御室の岸の根無草

何あだし世に生ひそめにけむ　　千載和歌集・花園左大臣家小大進
わが世しも千代にあらめやれなし草
たはれやせまし身のわかきとき　　古今六帖・讀人不知

## ねむのき　合歡　又がうかん合歡木

Albizzia julibrissin, Durazz.

（豆科）

「ねむのき」は山野に自生せる落葉喬木にして、幹の高さ一―二丈に達す。此樹いつの頃より「ねむ」と稱ふるに至りしものか、古き世には「がうか」といへり。

山深みいつよりねふと名をかへて
かうかの木には人まとふらん
夫木和歌抄・光俊

奥山のかうかの花もあはれなり
またもむすはぬみのためしとて
古今六帖・衣笠内大臣

葉は二回羽狀複葉にして、刀狀をなせる多數の細かき小葉よりなり、夕陽西に沒するに及





べば眠りに入るが如く靜に相閉合す。

ひるは咲き夜はこひぬる合歡花
われのみみめやわけきへにみよ　　萬葉集・紀郎女

ねむの花小曾はかりもしかられず　　也有
合歡木の晒りてぬるき清水哉　　仙花
ねむの木の葉こしもいとへ風の影　　芭蕉

七―八月梢頭に直徑一寸許ある紅色の花を開く。多くの雄蕊は特に細長くして赤く、遠くより之を眺むる時は、恰も赤き絹糸を束ねて作れる總の如く、又花簪に似て優しく且うるはしきものなり。

わきもこか形見のかうか花にのみ
咲きてけらしもみにならぬかも　　万葉集・家持
わきもこにかくとばかりは昔やらむ
形見のかうか花咲きにけり　　現存六帖・如家

花過ぎて後、大豆の果實に似て彼よりも大なる莢果を結ぶ。

## のきしのぶ　瓦葦　又しのぶぐさ・ことなしぐさ　忍草・耶無草

Polypodium lineare, Thunb.

（水龍骨科）

「のきしのぶ」は到る所に昔き羊齒類の一種にして、通常樹皮・岩面或は古き屋瓦などに生ずるものなるにより、枕草紙を始め多くの和歌などにも、專ら軒に生ふるものとなせるはよし。

しのぶ草いとあはれなり。屋のつま、さし出でたる物のつまなどに、あながちに生ひ出でたるさま、いとをかし。　枕草紙

我宿は軒のしのぶししげければ
ふけるあやめもみえぬけふ哉　堀川院百首

住わびて我さへ軒の忍草
忍ぶかたがたしげき宿かな　今鏡・周防内侍

故郷の軒に生ふてふ忍草
しのびに君をこふる頃かな　現存六帖・紀平

細刻して根の如き形をなせる莖は、質強靱にして、全面に稍やあらき褐色の毛茸を密生し、又所々より眞の根をも分出せり。細長き葉は長さ三―四寸許ありて根莖上に並列し、質厚く葉裏にて一個の主脈の如きものの兩側に、黄褐色をなせる子嚢群の並びつける有樣は、恰も八目鰻の鰓孔のある所に似たるより、一名を「やつめらん」ともいへり。古歌に「忍草」とあるは、此植物の別名なり。

君みづてほどをふるやのひさしには
あふことなしの草ぞ生ひける　新勅撰和歌集・醒人不知

ことなし草は思ふことなさにやあらんと思ふもおかし、又あしき事なりしなふにやといづれもおかし。　枕草紙

つまに生ふることなし草をみるからに
たのむ心ぞ且まさりける　後撰和歌集・醒人不知

## 考證

僧契仲は「忍草」の事なりとて、例に出せる二つの和歌を引證せられ、落合氏の言葉の泉にも、しかいはれたり。

畔田伴存は其著古名錄に於て今世の海州骨碎補は、多梅の開頃には葉枯落たり、此をみても古のシノブは今のシノブに非ることを知るべし。瓦葦は人家古軒及古木巖上に多く叢生す、石葦に似て短小にして三―五寸、石菖蒲に似たり、故に梅の木菖蒲と云、葉背に金星を生ず、四時不凋、近世ヤツメランと俗稱すといはれたり。

## はげいとう　雁來草　又かまつか　雁來紅　（莧科）

Amaranthus gangeiticus, L.

雁來草は其形狀概ね雞冠草に似たれども、人皆其麗はしき葉を玩ぶ爲に栽培するものなれば「はげいとう」とはいへるなり。枕草紙に、

わざとりたてて人めかすにもあらぬさまなれど、雁來草（カマツカ）の花らうたげなり、名ぞうたてげなる、かりの來る花と文字には書きたる。

とあり。又芭蕉の句に、

雞頭や雁の來る時猶あかし

ともある如く、葉はすべて燃ゆる如き紅色を呈せるか、或は黃紅相混じてうるはし。此草は元來東亞細亞の原產にして、古代支那より渡り來りしものなるが、其後廣く行きわたりて、今はいづこの花壇にも植ゑらるるに至れり。莖は高く伸び、夏秋の候葉腋に粟つぶの如き小さき花を簇生すれども、この物は賞するに足らず。

秋くれぬ雁來紅の上葉まで
まだ夏の心ならひや葉げいとう

蹴子
風雲



## はこべ　繁縷　又繁縷花　（石竹科）

Stellaria media, Vill.

「はこべ」は園圃路傍など到る所に群がり生ずる雜草にして、高さ五—六寸乃至尺餘に達す。全草甚だ軟弱にして食すべく、春の七種の一つなることは人の知る所なり。

けふぞかしなづなはこべらせりつみて
はや七種のおもりのまぬらむ

尖木和歌鈔・慈鎮和尚

葉は長さ七—八分許ある廣卵形にして先端尖り、相對して莖につけり。但莖の上部につけるものは無柄なれども、其下部につけるものは有柄なり。花は極めて小さき白色の五瓣花にして、春より夏に亘りて開く。莖葉は甚だ柔かなれば鳥類の嗜食する所にして、多く小鳥のすり餌を作るに用ふ。

鶯鳥やはこべ花咲く垣の下
春知らぬ里とはいはじはこべ草

紫泉
白鱗

迷ひ子も知るまい時ぞ繁縷花咲く

通彦

## はちく　淡竹　又くれたけ　呉竹　（禾本科）

Phyllostachys puberula Munro.

枕草紙に。物もいはで御簾をもたげてそよろときし入るるは呉竹の枝なりけり、おい此の君にこそといひたるをききて、いざやこれ殿上に行きて語らんとて、中將新中將六位どもなどありけるはいぬ。

とある物語は、清少納言の博學を證する印として、古へより名高き逸話なり。又徒然草に、

くれたけは葉ほそく、河竹は葉ひろし、御簾に近きは河竹、仁壽殿の方によりて植られたるは呉竹なり。

と出てたるなど、呉竹の事は古き典籍、古歌などに多く現はれたるものなれども、果して如何なる種類の竹をさしていへるかにつきては、異說ありて、頓に定め難けれども、暫く屋代弘賢氏の說にたよりて、淡竹の部類に入るべきものと見做したり。

我ともと君が御垣のくれ竹は

千代に幾世のかげをそふらん　千載和歌集・後成

此竹は四國、九州の如き暖國に多きものにして、高さ二丈周り六―七寸位を常とすれども、尙ほ是より大なるも亦小なるもあり。和漢三才圖會に、淡竹は白竹也とある如く、稈は白粉を帶び、「まだけ」に比ぶれば節と節との間隔短かく、葉は枝の先端に多くつきて、「まだけ」の葉よりも少しく短小なり。筍の出づるは早くして四月頃に生ず。竹細工に用ひらるること甚だ多し。

櫻花けふよく見てむ呉竹の
一夜のほどにちりもこそすれ　後撰和歌集・是則

柳ならあんじもせねど藪の内
どうぞなれずにくれ竹の雪　龜樂

森の手をまつ蓋やくれの竹
呉竹の宋人赤しふびす講　紫紅

景常

### 考證

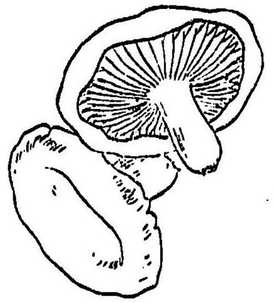
呉竹は古より仁壽殿前の北の方に植ゑられし竹にて、即ち淡竹の一種細小なるものなり、故に今俗また之をさして、ハチクといひ、淡名を笹竹一名甜竹といふ。其高さ大抵一丈許にて枝葉極めて繁茂し、其狀頗る淡竹に彷彿たりと雖も、每節却て

淡竹よりも密にして高し。順朝臣の文字集略を引きて、笄は簫に似て節繁り葉滋きものなりといひ、飛行法師及一條禪閤の說にも、呉竹は世の常の竹より葉細しといへるは即これなり。今江都にては此竹を以て火にて炙り瀝を去て曝し竹になし作籠家の用にす、或は呉竹を採て釣竿となし、其枝は別に縛束して苦竹を其柄とし以て掃箒とす。扨日本紀略に弘仁四年天下の竹悉く枯るといひしは、此竹のみし以て掃箒とす。扨日本紀略に弘仁四年天下の竹悉く枯るといひしは、此竹のみ枯て其餘の竹は枯ることなき意なれば、本草辨疑に寛文六年より本朝の竹悉く枯て皆根を斷つ淡竹の外は枯れず、といへるに其意全く同じければ、いよ〳〵古に呉竹と稱するものは即淡竹の類なること、これにてもおしはかるべし。（屋代弘賢著古今要覽稿抄）

## はつたけ　青頭菌　又初茸　（菌類）

Lactarius Hatsudake, N. Tanaka.

「はつたけ」は松茸の生ずる如き所、或は其他の郊野などにも生ひ出るものにして秋の初めに多く生ず。其形「しめぢ」に似て、大さ一-二寸位あり。元來淡灰褐色のものなれども、各部少しにても疵を受くる時は、忽ち青綠色に變ずるを以て、市場に販賣せるものは殆どすべて碧色の斑紋を有せざるものなしといふも可なり。生殖器は傘の裏面をなせる菌褶に生じ、無數の無性胞子を放散す。



菌類のうちより初る日蔭かな　且水
はつ茸や妹にくはせん草結び　沽遊
はつ茸や鹽にも漬す一盛　才丸
初茸やまばらにつなぐ宿つづき　沽圃

## ははきぐさ　地膚　又はははきぎ　箒木・箒草　（藜科）

Kochia scoparia, Schrad.

地膚は山家の軒下或は荒地の片隅などに自生せるものあれども、亦草箒を造らんが爲に、特に栽培せらるゝものも少からず。

空地は水をためて池めかし、深草の人しなければ藜の花穗に立のびぬ　なもみ、箒木色づ

きわたる、雨風につけても虫の聲間まさり、夫かたの空もうつつなるに、待に必ず出る月哉、とことはりし窓ふたかたに明めり、北にうたたねして炎夏わづらはしからず。

蟬柑文集

北樓の木に傍ひて左の方に、木の葉のまんまるに茂りたる木あり、たとへば菜園にある蓽撥の繁りたるに似なり。

此草は高さ二三尺に及び、細長き小枝を分つこと甚だ繁ければ、草簾を造るには殊に能へ向きのものといふも不可なかるべし。葉は線形或は篦狀披針形にして互生し、三個の縦走せる葉脈は特に著しく、夏の暑き日に梢頭或は葉腋に、穗狀をなして粟粒の如き小花を密生す。

ははきぎに殘るあつさや蜜屋敷　多代女
あへてこの蓽撥のほろ〳〵と成て只　杉風
蓽撥や人馬へだつる五月雨　其角
蓽撥の微雨にこぼれてなく蚊かな　柳雨
ははきぎの百日なき子に別れ哉　其一角



嫩葉は食すべく、果實よりは一種の食料油を搾り、秋田地方にてはどんぶりといへり。又、

その原や伏屋に生ふる蓽撥の　新古今和歌集・是則
ありとはみえてあはぬ君かな
蓽撥の帶やいづこおぼつかな　金葉和歌集・師賢
みなその原は紅葉しにけり

の如く信濃國園原といふ所の蓽撥を詠める古歌多くあり、是につきては古來彼れ是れの說をなすもの少からねども、要するに漠として今尙ほ甚だ確かならず。從つて此等は此處にいへる蓽撥にあらぬことはいふまでもなし。

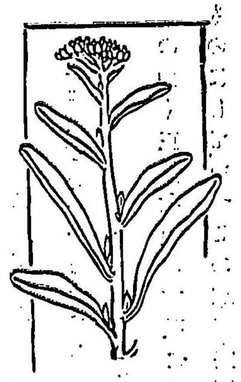
## ははこぐさ　鼠麹草

又おぎやち・ははこ・ごぎやち・御形・御行・仏子草

Gnaphalium multiceps, Wall.　（菊科）

せりなづなすずなすすしろ佛の座
御行はこべらこれぞ七種

の如く正月七種の古歌に多く詠まれたる御行は、今の世に「ははこぐさ」と稱ふるものにして、いづこの草野・路傍などにも多く自生せる草なり。單獨に直立し、或は



地面に近く多くの枝を分てることもあり。〔茎草父子草に似て、白色の軟毛を以て包まる。〕互生葉は長さ一―二寸許ある線狀披針形にして、質柔かなり。茎頂に短かき數梗を分ち、春より秋に亘りて小さき黄色の頭狀花を群がり着く。其色甚だ鮮かにして光澤あり、白毛と共によく人の注意を惹くものなり。今の世に蓬を以て草餅をつくる如く、此植物の嫩苗を摘みて餅に交へ、三月の節祭りにそなへしことは古き世に行はれたり。

三日の夜のもちひはくはじ類はし　後拾遺和歌集・寛方

きけばよどのにははと摘むなり

ははこつむやよひの月になりぬれば　好忠集

ひらけぬらしたる我宿のもも

花のさく心もしらず春の野に　夫木和歌鈔・和泉式部

はらはらつめるはははこもちみそ

君がためやよひになれば夜毒きへ　後輯集

阿部の市路にははこつむなり

考證

田野有草俗名母子草、二月始生茎葉白脆、毎屬三月三日、婦女採之蒸擣之以爲餻、傳爲歳事。（文德實錄）

鼠麹草又佛耳草とも云、三―四月黄花をひらく、葉は白蓋に似て白し、野圃に多く生ず。（中略）日本にも昔は三月三日の草餅は是を以てつくる由文德實錄第一卷に見えたり、今も村人はこれを以糕に加ふ、俗に上蒲艾と云、ねばりて艾葉糕にまされり故又俗にモチヨモギと云、或曰七種菜のゴギヤウと云は是也。（貝原益軒著大和本草）

## ははそ　柞

さほ山の柞の紅葉ちりぬべみ　古今和歌集・讀人不知

よるさへみよとてらす月影

日を經ても同じ柞のうす紅葉　宣長

上の眺りの色とかはみむ

など柞の紅葉は、古き御代より和歌などに多く詠まれたれど、今の世の如何なる植物に相當せるかを稽ふるは、甚だ六ヶ敷き事にて、大方楢類柳類將た櫟類中の何れかに當れる事は確かなれども、それ以上のことに至りては、漠として確かむるに

由なければ、此の處にては暫く數個の引例と、先學の考說とを擧ぐるに留めて、參考の資料に供することとなせり。

時ならで柿の紅葉ちりにけり
いかにこのもと寂しかるらむ　拾遺和歌集・天暦御製

さほ山の柿の色はうすけれど
秋は深くもなりにけるかな　古今和歌集・忠則

片岡のはぜのもみぢ色づきて
秋風寒く雁ぞ鳴なる　現在六帖・爲氏

## 考證

今按ずるに波々曾は、大同類聚方に載るところの波保曾加之波と一物也、其波保曾は、即細葉の義、又本草啓蒙に、大和にては保曾とも云よしみえたり、此の葉頗る櫇葉に似て細小狹長なるを以て、波保曾とも波々曾とも名附しなり。其葉霜變紅最はえある故に、源氏物語に、冬のはじめ朝霜のむすぶべき菊のまがき、われはかほなるはぜ原といへり。古歌にハハソの紅葉を詠ぜしは、これなり。又一種波々曾あり、之は黃葉にして紅葉はせぬものなり。

さほ山の柿の色はうすけれど
秋は深くもなりにけるかな

柿原うすきならひをわすれつつ
しぐれにかこつ秋の山かな

と詠めるは、皆黃葉のものをいへり。又ハハソすると詠める歌殊に多し、この柿は藥鹽草にコナラガシハは柞なりといへるものにして、後條にのする所のコナラを指ていふ。かかれば新撰字鏡に、柏を波々曾と訓ぜしも、其意味ありといふべし。（屋代弘賢著古今要覽稿抄）

白井光太郎氏は植物學雜誌に於て、按ずるに山城・大和・近江邊にてハハソといひ關東の諸地にてナラといひ、木曾にてマキといふは、落葉櫟・楢屬を總稱するの名に近しとす、大和吉野邊にては、コナラをマホホソ・ナガホホソ・ホホソをドボホソ、ミヅナラをヤマホホソ、ガシハナラをカシハハソ又單にカシハといへりと、而して尙次の如く記載せられたり。

オホガシハ Q. dentata, Thunb, var Wrightii, A. DC. 一名オホハハソ此の二名は飯沼氏草木圖說に出づ。

ナラガシハ Q. aliena Bl. 和州吉野山邊にてはカシハハソ又單にカシハといふ。

小野蘭山本草啓蒙槲の條に、ハハソ・一名ナラ・一名ホウ・一名ホウガシハ・一名カシハ、一名モチガシハ・一名カシハギ・一名マキ・一名ゴウゴウシバの十名をあげたり。

ミヅナラ Q. grosseserrata Bl. 日光・富士・秩父等の諸山にてミヅナラと呼ぶ者是なり、又和州前鬼山にては之をヤマホソといへり。

オホナラ Q. crispula Bl. 一名マナラ・一名フイシナラ・此の二名草本圖說に出づ、滋賀縣下にては之をホソノキといふ、通例楢字を此種の漢名とす。

ヒナラ Q. glandulifera Bl. 遠州秋葉山にてはホソノキといひ、和州吉野山にてはマホソ、和州前鬼山にてはノホソといふ漢名抱。

## はまおもと　文珠蘭　又はまゆふ　潮木綿・潮芭蕉（石蒜科）

Crinium asiaticum, L. var. japonicum, Baker.

「はまおもと」は暖國の海岸に自生せる常綠草本にして、莖の高さ五六寸より一尺位に及び、其周りには多くの大なる薄き鱗片葉の相重りてつけるものあり。古き歌文に「はまゆふ」の幾重なるらんとか、百重なすはまゆふなどあるはすべて此有樣を寫していへるものなり。

上を外に見て月に咲ける玉津島云々。

へだてたる人の心をみくま野の
浦のはまゆふ幾重なるらん

女房の事をほかからず十五ばかりぞあるも、袖口きぬのかさなりたる程、浦のはまゆふに
やあらむいくへとも知りがたし。　榮花物語御製

みくま野の浦のはまゆふ咲く時は
百重の波のよるかとぞみる　落窪物語

莖は一般に太く且短かくして、其先端より數枚の葉を叢生す。葉の形は「おもと」に似て、長さ一—二尺許あり。夏月葉心より花莖を抽き、其頂端に數個の美しき白色の花を開く。花冠は合瓣なれども線邊深く六個に分裂して甚だしく外反し、其形顯

みくま野の浦のはまゆふ百重なす
心はもえどただにあはぬかも　万葉集・人麿

さしながら人の心をみくま野の
浦のはまゆふ幾重なるらん　拾遺和歌集・柴慈

由良の湊を見渡せば、漕ぎ船の梶をたえ、浦のはまゆふ幾重とも知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山淋々と、勝代の松にかかれる磯の波、和歌吹　太平記

る百合の花に似たり。昔大臣の大饗の際に、此植物の葉を以て、雉の料理を包む習ひありしといふ。

考證

ハマユフは芭蕉に似て小さき草なり、葉の幾重ともなく重りたるなり、べぎて見れば、白くて紙などの樣にへだてあるなり、大臣の大饗などには鳥の別足を包む料に三熊野よりしてのぼせらるる。（仙覺抄）

濱木綿は紀伊の國の御熊野にあらず、志摩國眞熊野の浦より大臣の大饗の時獻ずること舊例なり、是を以て雉の足を包むとぞ。（岡林採藥抄）

芝原春房が語りける、濱木綿は或人もいへるが如く、今の世にハマオモトといふものなるべし、中略、常に潮をそそげばよく榮ゆといへり、七月頃花咲く、其色白くて、たれたるが木綿に似たるより濱木綿と云ひけるにや、今も紀の國熊野浦に又其近きわたりの浦々にもありて、須賀島といふ所に殊に多くありと云へり。（本居宣長　玉勝間）

## はるのななくさ



春の七草といへるは、秋の七草に對していふことにて、多くは略して單に七草といへり。昔正月七日にこれを羹となして食するときは、一年中の萬病を除くといひ習はせしものなり。されば歌林四季物語に、

またななくさのみくさあつめることは、日さいかうを和すれば、一とせの病患をのがるると申すためしふるき文に侍るとかや。（中略）みやこの外の七つのとて七所の野にて一くさづつをわかちとらせ給ふ、せりなづな・おぎやう・すずしろ・佛の座・川なくくたち・とかや申すなるべし。

とあり、又塵添壒囊抄には、

正月七日の七草の羹といふは七種何々ぞ、七種といふは異說あるか一准ならず、或歌には、

せりなづな五行たびらく佛の座
あしなみみなし是や七種

と、又、

岸五行なづなはこべら佛の座
すずなみみなし是や七種

と見えたり。されど後には羹となさで、專らまないたの上にて細かくたたきざみて粥に交へ、七日の朝食することとなれり。是を七草の粥といふ。たたき方に

定まれる次第あり。こゝに、左に示す如き七草雙紙の一節によりても知らる。

七草を柳木の盤に載せて、玉椿の枝にて、六日の酉の時に、唐、戎の時に、爽、寅の時にごげふ、子の時にたびらこ、丑の時に佛の座、寅の時に鈴菜、卯の時にすずしろを打ちて辰の時に七草を合せて東の方より、碧井の水をむすびあげて若水と名づけ云々。

七種やたたきたがりて泣く子かな　俊似

七種や拍子とる子の掘り蕗　湖月

七種にとどろく厨や猫の妻　介我

七種や明ぬに郭の枕もと　北角

右の外理齊隨筆といへる書には、

正月七日の七種は稻・麥・豆・粟・小豆・小麥・此の七種を以て來ることなり、尖故に七種と書てなゝぐさと訓ずるなり、宇多天皇の御時改て、芹・薺・鼠麹草・繁・佛の座・蘩蔞・御なり、右七種を用ひられしなり、古は上の子の日に摘りし七つの字に作りて七日を用る事とはなりしとぞ。

とありて、此七種の品々は、公事根源に見えたるものと同一なれど、前にもいへる如く、此事につきては古來異說甚だ多く、今たやすくそれとも定め難ければ、遺憾ながら諸說のある所を記すに止めたり。尚ほ各種の如何なるものなるかは、それぞれの所につきて知るべし。



## ひあふぎ　射干

又からすあふぎ　檜扇・烏扇　（鳶尾科）　Belamcanda chinensis, Lem.

射干の山野に自生するものなきにあらねども、多くは觀賞用として庭園に植えらるる草花にして、充分生長する時は高さ四・五尺に達す。葉の形は溪蓀・菖蒲・花などに似たる幅廣き劍狀葉にして、數個相重りて出たる樣は恰も檜扇を廣げたるに似たるより此の名あり。七・八月頃葉心より長き花莖を抽きて、莖頂に數個の花を開く。花は大さ一寸許あり、黃赤色に濃色の斑點ある六個の花蓋よりなりて、すがたやさしきものなり。

よもぎふにさるをあれや庭の面に　からすあふぎのなどしげるらん　夫木和歌抄・西行上人

## ひかげのかづら　石松

又ひかげ・ひかげぐさ・日影・日蔭・女蘿・蘿蔦　（石松科）

Lycopodium chabatum, L.

石松は少しく奥深き山の陽地に自生せる隱花植物にして、莖の長さは一―二尺より數尺に及び、紐の如き形をなして地上をはひ、所々より支條を分つ。取りて神となすこと頗る妙なり。

天御目命、高座の藤をかづらにし、蘿蔦を鬘にし、竹の葉伏蘭木の葉を手草にして、著鐸の矛を持ちて、石窟の前にて伸儀をして、相共に歌ひまひて云々。　神皇正統記

針のごとき披針形をなせる常綠葉の莖の周りに密生せる有樣は、恰かも杉の如くにも見ゆれども、葉質柔かにして卵性に富めり。支條の上端は二條乃至四條に分岐し、特に異なれる鱗片葉を以て被はれたる、長さ一寸許の圓柱狀體をなす。是れ芽胞囊と名くる小さき囊の如き生殖器の集れる部分にして、此芽胞囊熟する時は、裂開して其内より胞子と稱する種子の如きものを散出す。古來宮中にて新嘗の神事、豐明の節會などには、此の莖を冠の笄の左右にかくる古例ありといふ。されば古歌には多く豐の明に詠み合せたり。





をみ衣けふまてかざす日かげ草　　現存六帖・爲家

豐の明の名こそしるけれ

木綿しての日陰の蔓よりかけて　　榮花物語・輔親

豐の明の面白きかな

宮人のかづらにすなる日かげ草　　千載

遊つ神代もかけて忍ばむ

内裏は五節のほどこそすずろにただならで、見る人もをかしうおぼゆれ、(中略)山藍・白藍など、柳筥に入れて、冠したる男もてありく、いとをかしう見ゆる。　枕草紙

あしびきのやましたる日陰かづらなる　　万葉集・家持

うへにやさらに梅をしのばむ

又胞子は濕氣を吸收せざるを以て、丸藥の衣に用ひらる。藥輔に石松子と稱へて販賣する所のキナコの如きものは即ち是なり。

## 考證

日本紀私記云、爲鬘以羅比加介加都良、又曰く、唐韻云羅女羅、日本紀私記云羅比加介。(和名抄)

ヒカゲは地より生ず、寄生にはあらず、實ありて多くなるコケに似て長きかづらなり。(貝原益軒著大和本草)

ヒカゲカヅラ一名ヒカゲグサ、一名狐ノヲガセ、一名狐ノタスキは即ち玉柏の一種地上に蔓延するものなり、故に其の形狀は全く玉柏と相同じ。偖ヒカゲの物にみえたるは、天照御神の天の岩窟に隱れ玉ひし時、天宇受賣命其の窟戸の前にて手次となして巧に俳優をなせしを始とし、其の手次とせし物を以て、内親王以下命婦女孺及び行列の人々之を鬘とせしは、踐祚大嘗祭の時を始とす。又ヒカゲに日影の字を用ひしは太安麿を始とし、(古事記)それを日蔭の字に代しは藤原忠平を始とす。(延喜式)此の二つは其の字異なりと雖も、原より皇朝の名なるを、それに西土の蘿の字を塡られしは舍人親王を始とし、(日本紀)更に唐韻を引て女蘿の字を訓ぜしは順朝臣を始とし、(和名抄)其の女蘿の字によりて、近頃の說には松蘿をも亦女蘿の名あるによりて、ヒカゲは即ち猿ノヲガセなりといへど、今十一月新嘗祭の時用ゆるヒカゲノカヅラは正しく此の狐ノヲガセなれば、古のヒカゲも必ず此の物をさしていへること明けし。(屋代弘賢著古今要覽稿抄)

蘿松蘿サガリゴケをも皆一物として古事記傳にあげたるは誤なり、日蘿即ち日陰葛と松蘿即ちサガリ苔とは別なるべし、蘿は土左にてはサルノタスキともいふ。(鹿持雅澄著万葉集品物解)

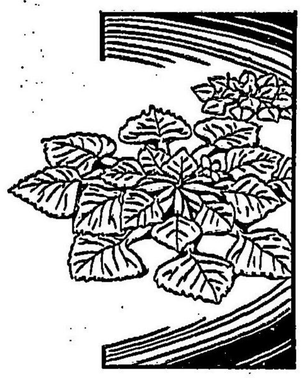




## ひし　菱　又芰　(菱科)

Trapa natans, L. var. bispinosa, Makino.

菱は古き池沼溝などに自生せる水生植物にして、五月頃幼芽を出し、蔓は蔓狀をなして水中を延々し、多くの葉を水面に浮ぶ。



あさりせし水のみさびにとぢられて
菱の浮葉に虫なくなり
千載和歌集・後鳥羽

葉の形は稍や三角形をなして鋸齒を具へ、葉柄の怪しく棍棒狀に膨大して浮葉のはたらきをなせるは、人のよく知る所なり。七八月頃葉間に花を開く。花は形小なれども花瓣の數四個ありて、帶紅白色を呈せり。

白露やひけば集まる菱の花　其角
鴉の巢をかかへて咲くや菱の花　遲塵
くつるぎて月影みせよ菱の花　何處
六月の水乞ふ草や菱の花　雄哮

北後大さ一寸許ありて、兩角に鋭き刺を有し、濃褐紫色を呈せる堅果を結ぶ、所謂菱の實と稱するもの是なり。此物の莖或は煤てたるものの皮をはぎて食するに、香ばしくして味ひ佳なり。清國上海・漢口・南京など到る所の市街地にては、其煤てたるものを盛に販賣し、支那人は喜びて購ひ食す。又泉・池などに浮べ、或は水盤に養ひて雅致あり。

君がためうきねの池に菱摘むと
　わが染めしそでぬれにけるかも　　万葉集・人麿

故郷の池におりたちとるひしの
　すみきひしくはなき身なりけり　　新撰六帖・光俊

いかにして池のひしつる浮事は
　初めもはても思ひわくべき　　現存六帖・爲家

## ひひらぎ　杜谷樹　又柊・狗骨樹　（木犀科）

Osmanthus aquifolium B. et H.

柊は多く庭園に栽培せらるる常綠喬木にして、幹の高さ通常一―二丈に達す。葉は革質にして互生し、長さ一寸六―七分許ある楕圓形にして、葉緣にある針狀の大鋸齒は特に鋭の如くとがりて荒々し。是を以て古へ十二月晦日、幷に節分の鬼はらひに、此樹を用ひたる例多くの古書に見ゆ。

今日は京のみぞ思ひやらるる、九重の門のしりくめ縄の鰯の頭、ひひら木ら、いかにとぞいひあへる。　　土佐日記

鰯のはさみ物、柊の條はなやらふ家には、百敗ならてもある事なれども、殊に内裏には掃部司例として仕う奉れり、このなやらふ事は唐土にも待れど、別きて我御國には神武天皇の六年の春よりものし給ふ御事にて、いみじき御例なり。　　四季物語

一枝の梅はそへずや柊ちり　　也有
柊をさすやついぢの崩まで　　蝶夢
月花の果や柊や赤鰯　　柳居
柊ささぬ内をさかりや寒念佛　　也有

秋月大さ一―二分許なる小さき白色の花を葉腋に簇生す。花は四瓣よりなり、翌年に至りて黑紫色の漿果を結ぶ。

觀賞用として中庭などに植ふらるる普通の種類の外に、葉に黃或は白の斑入りのものあり。鉢植として特に貴ばるといふ。尙ほ也有の著鬼傳に次の如き面白き文句あり。

神々のいかりつよく鰐・梓の弊道具にかり用され、ついに瓶豆の追放におふて、婆婆にもただずむかたなくて罠逸の用かはりに廻き、しばし佛のしめしに發遣せしも、衣の假合ぬむまれつきなれば、是非なく業の秤目をならひ、釜の火のたき加減を強へ、呵責のあら仕事に獄卒とよばれ、地獄の六尺とはなりぬ。

世の中は數なられどもひひらぎの
色に出でても昔はじと思ふ

## ひまはり　向日葵　又唐葵　（菊科）

Helianthus annuus, L.

向日葵は、生育最も盛なる一年生草本にして、大形の花を生ずるを以て、よく各所の庭に植えらる。頭狀花は周圍の舌狀花と中央部の筒狀花とよりなりて黄色を帶び、日光に從ひて廻轉する性質あるより、枕草紙にも、

唐葵はとりわきて見えれど、日の影に隨ひて傾くらんぞなべての草木の心とも覺えてをかしき。

と書かれたり。頭狀花の大なるものは直徑七八寸もありて、莖枝の先端に一個づつ着けり。此植物は元來メキシコの原産にして、莖の高さは六―七尺に伸び、互生葉は長き葉柄を有して卵形なり。

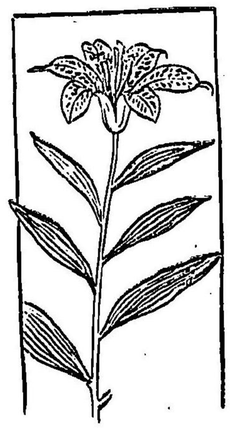
### 考證

カラアフヒといへる名は、一種のものの名にはあらで、まづ葵をもとにて、葵の同じ類のものの異なるものをカラアフヒといへるにて、獨葵をも花葵をもまた日向葵をも、ともにカラアフヒとはいへるなるべし。枕草紙なるは日向葵なるべし、そのよしは獨葵花は日のかげにしたがひてかたぶくものにもあらず、日向葵は日にしたがひて廻るものなればなり。（殿村常久著千草の根ざし）

## ひめゆり　山丹　又ひかりぐさ　姫百合　（百合科）

Lilium concolor Salisb.

山丹は山野に自生するものなれども、亦庭園に栽培せらるる草本にして、卵形をなせる地下莖は非形小さく、又鱗片の數も鬼百合の如く多からず。地上莖は高さ一―二尺に達して直立す。葉は互生して莖に着き、長さ一寸五分乃至三―四寸許ある披針形若くは線狀披針形をなせり。四―五月頃莖の頂端に一個若くは二―三個の直



姫百合は十二・三ばかりなる娘の、後に帶美しく結びたるが如し。

立せる花を開く。花被は鬼百合の花の如くに大ならず、又強く開展外反することなし。通常黄・赤の二種ありて、夏の野の草深き繁みに獨り咲き出でたる姿はしほらしきものなり。許六の賦に、

とあり。賦に其容姿の如何にも愛らしき有樣を言ひ現はして、至れり盡せりといふべし。

夏の野に雨をやさしと忍ぶらん
　薬がくれに咲く姫百合の花　　春海

みめいづれ花の姫ゆり美人草　　良政

姫百合草や小町がむかし後ろ組　　非哥

姫ゆりやあかるい事をあちら向　　千代女

見は仰ともおぼえぬ物哉、人のかごとを御用ありて、尖ひ給ひし中將姫の、何しに此世にましますべき、いかにおたづれありとても、今は御身も夏草の、しげみにまじる姫ゆりのしられぬ御身なり、何をか歎れ給ふらん。　謠曲・當麻山

夏の野のしげみに咲ける姫ゆりの

しられぬこひはくるしきものを　　萬葉集・坂上郎女

大江山今も生野の道の遠に
　姫ゆりもあり丸ゆりもあり　　菊丸

夏の野を心しづかに分けゆけば
　花にをどろくひかり草哉　　藏玉集

## びやくだん　檀香

又せんだん　栴檀・白檀・白栴檀　（檀香科）

Santalum album, L.

母急ぎ走り寄りて、正行が小腕に取りつき、泪を流して申けるは、栴檀は二葉より芳ばしといへり、汝をさなくとも、父が子ならば見程の理に迷ふべしや、小心にも能々事のさまを思ひて見よかし。　太平記

栴檀は二葉より芳ばしくて、四十里の伊闍を翻し、頻迦の鳥は卵の中にてあれども、其聲諸鳥に勝れたり。　源平盛衰記

などとある如く、古來人口に膾炙せる『栴檀は二葉より香ばし』といへる諺の起りは、佛經の觀佛三昧經に、牛頭栴檀生伊蘭叢中、未及長大在地下

時芽莖枝葉如閻浮提竹筍云々、仲秋滿月卒從地出成栴檀樹、衆皆開牛頭栴檀上妙之香永無伊蘭臭惡之氣、とあるによりたるものの由白井博士のいはれたり。元來此樹は東印度・濠洲及ポリネシヤ諸島等に產する植物にして、材は質堅く且重くして黃色を呈せるを以て貴しとなす。古代より我邦に渡り來りて、薰物となし、又釋迦觀音の像などを刻むに用ひられたり。

しろがねこがれの香爐に、さまざまの寶の香をたきたれば、院のうち栴檀・沈水の香に充ち薰れり、色々の花そらより四方にとびまがふ。　榮花物語・音樂

中宮の遣らせ給ひける御佛、田でおはしましたれば、二條殿にいでさせ給ひて、供養せさせ給ふ、白檀の御佛三尺ばかりにて、いと美しうおはします、阿彌陀の三尊なり、これは御八講にせさせ給ふ。　榮花物語・堀の後

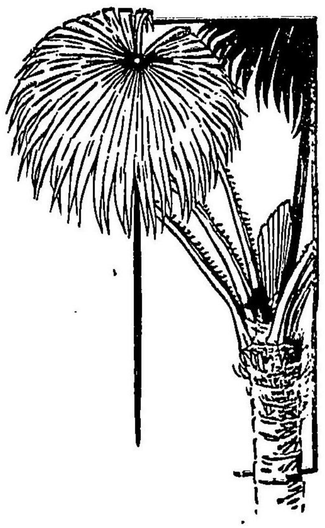
名香には、唐の百步のからをたき給へり、あみだ佛・けうじの菩薩、おのおのびやくだんして作り奉りたる、こまかにうつくしげなり。　源氏物語・鈴蟲

彼地にては幹の高さ通常二-三丈に達し、葉は四時青々として綠の變ることなく、相對して莖につき、其形榊・椎などに似て葉面滑かなり。小さき花は專ら枝の先端に集りて開けども香氣なく、深褐紫色を呈して春月より初秋に亘りて咲き、黑色の小漿果を結ぶ。印度の土人は此樹の材の粉末となしたるものを煉りて膏藥の如き形となし、皮膚の創傷などを治するに用ふといふ。

## びらう　蒲葵　又檳榔　(棕櫚科)

Livistonia chinensis, Br.

「びらう」は支那に產する單子葉の大なる木本にして、高さ數丈に達す。全形棕櫚に類似して、大なる掌狀葉は幹の先端に群がりつけども、各裂片は棕櫚の如く全然分離せず。然ども、其先端は銳く二裂せり。古代高貴の人々の乘用に供せし檳榔毛の車は、此植物の葉を以て屋形の蓋を飾りしものの由、枕草紙に、



檳榔毛はのどやかにやりたる、急ぎたるは輕々しく見ゆ、細代は走らせたる、人の門より渡りたるをふと見る程もなくすぎて、供の人ばかり走るを、誰ならんと思ふこそをかしけれ、ゆるゆると久しく行けばいとわろし。

とあり、又源氏物語・寄生の一節に、

上の女房さながら御送仕う來らせ給ひける、廂の御水にて、廂なき糸毛三つ、檳

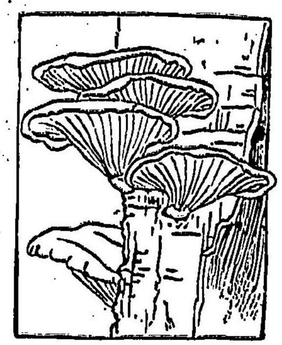
御弔のこがれづくり六つ、ただの根御弔二十、紐代二つ、女房三十人、殿下仕八人づつ侍ふに、又迎のいだし車十二、水所の人人のせてたんありける、御送の上達部殿上人六位などいふかぎりなふいとをかしげにをはす。

とも見えたり。

材は諸種の用に供せられ、葉も亦乾燥して笠又は團扇を作るに多く用ひらる。

## ひらたけ　天花蕈　又平茸　（菌類）

Agaricus subfumeroeus, Berk



平茸は楡、榎、楤木など、諸濶葉樹の莖幹に發生するものにして、莖は太短かく、長さ一寸にも充たざるばかりなり。傘の大なるものは直徑五―六寸に及び、緣邊少しく下方に曲りて肉稍や薄く、表面は平滑にして裏面の菌褶は松茸などのそれに等し。全體灰色若くは淡褐色を帶びて、形狀色彩等つきよだけ」によく似たり。極めて美味なる食用菌類の一種にして、其味あはびに似たる所あるより一名を「あはびたけ」といひ、又傘の上皮を剝ぎ、柔き部分のみを食用に供するを以て、或は「むきたけ」とも稱する所ありといふ。

水曾何をもあたらじきものをば無鹽といふぞと心得て、ぶゑんの平茸ここにあり、疾う〳〵といそがす、根茸小彌太階膳す、田合介子の、極めて大に回かりけるに、彼うづだかうよそひ、御菜三種して、平茸の汁にてまゐらせたり、水曾殿が前にも、同じ體にてすゑたりけり。

平家物語

觀知僧都、九條の太政大臣のさとに平茸を送るとてそへ侍りける。

たひらかに平のきやうにすむ人は
　ひらたけをこそくふべかりけれ

かへし、粕岡、

平茸はよき武者にこそ似たりけれ
　をそろしながらさすがみまほし

これも今は昔丹波國篠村といふ所に年比平茸やるかたもなくおほかりけり、里村のものこれをとりて、人にもこころざし、またわれも喰ひなどして年頃過ぐるほどに云々。

宇治拾遺物語

### 考證

彼の今昔物語にある、御經の左大臣の讀經を勸める僧が、藤の木に生ぜるヒラタケを食ふて死せしと記せしは、蓋し此のヒラタケにはあらずして、ツキヨタケを誤

りてヒラタケと記せしものならん。（新撰日本植物図説）

信州の戸隠山にはツキヨタケと稱して夜光る茸がある、光の強さは新聞の字がぼんやりと分る位、（中略）之は多く藤の木に生ずるもので、光るのは傘の裏である、（中略）稚茸と誤られるよりも、ヒラタケと誤られる方が更に多い、ヒラタケは極めて美味な食用菌で、形も色も味もよく似て居る、唯ヒラタケの方は稍や鼠若くは淡褐色を帶び、周邊の肉も亦薄い。（川村清一）

## ひるがほ　旋花　又かほばな・蕣花・蕣花・朝花　（旋花科）

Calystegia sepium, R. Br.

旋花の花は其形牽子花に似て少し小さく、地の焦ゆる如き夏の日中をも恐るることなく、盛に咲き揃へるが故に、蕣顔の俗字をも用ひられ、又、

蕣子花の面のつよさよ蕣の顔　千代女
子供等よひるがほ咲きぬ瓜むかん　芭蕉
ひるがほや目はくもれども花盛り　浩圃
蕣顔やとちらの碑も間に合はず　也有

の如き名句も詠まれたるなり。花の色は淡紅白色にして、品よき姿なれども、未だ人工を以て培養せられしことをきかざるは、なにとなくをしき心地す。萬葉集には專ら「かほばな」と詠めり。

いはばしのままに咲きたる蕣花の　たかまどの野邊の牽花おもかげに
花にしあり けりあり つつみれば　みえつついもは忘れかねつも
うやちひさつみやのせがはのかほばなの　萬葉集・東歌
こひてかぬらむきそもこよひも　萬葉集・防人不知
萬葉集・防人不知

蔓は地上に平臥してはひのび、又他物に絡みつきて上昇することもあり。葉は長さ二―三寸許ある稍や細長き戟形にして互生し、いづれの野原にもよく繁茂す。花は五月頃より八―九月頃まで開く。

### 考證

カホバナは或説に今の世のヒルガホといふものならむといへるよろし、其花アサガホにいとよく似て稍や小さく、淡紅色なり、又白色なるもあり、蕣しぼまぬ故に

世にヒルガホと云り、さて、河邊の野に生たるが多きによりて、河によみあはせたるもあり、かくて萬葉十四にこひてかぬらむとあるも、ヒルガホの日中にはよく開て莽方には眠り萎むさまによくかなひたり、かくて和名抄に本草云旋花、和名波夜比止久佐とあるを、本草啓蒙には韮顔にあてたり、漢名旋花のヒルガホなることはさらなり、さて今も備後にては此の花をカッポッといふ由小野博云り、これすなはち可保といふを訛れるものにて、古名の田舍に遺れるものなり。（加持雅澄著萬葉集品物解）

## ひるむしろ　眼子菜　又蛇床子（眼子菜科）

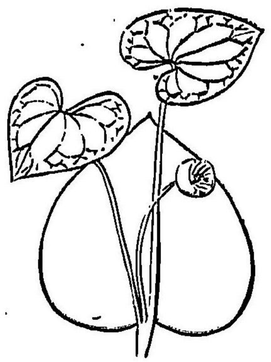
Potamogeton polygonifolius, Pour.

眼子菜は水田・池・沼・溝渠などに盛に繁殖せる水草にして、全草水中に漂ひ、細長き紐の如き莖の節部よりは、根と長き葉柄とを出す。葉の形の悪に似たるより、又「さじも」ともいへる名あり。葉面は深綠色にして光澤あり、よく水滴を反撥し、裏面は紫色を帶べり。花穗の形は稍や土筆に似て、黄綠淡色の小花よりなり、長き花梗の先端につけり。幼き莖葉は湯に通して苦味を去り、食用に供することを得べし。

澤瀉も名のをかしきなり、心あがりしけんと思ふに、三稜草・蛇床子・菅・末蝋・雪間の青草・酢漿あやのもんにても、こともものよりはをかし。　枕草紙

## ふたばあふひ　雙葉細辛　又あふひ　（馬兜鈴科）

Asarum caulescens, Maxim.



「ふたばあふひ」は主として山地に生ずる莖草にして、細き莖は地上を這ひ、其節部よりは根蔕と葉とを生ぜり。葉の形は心臓形にして、葉緣には鋸齒を具へず、長き葉柄を以て通常二個づつ節部につけるにより、「ふたばあふひ」の名あり。古來京都加茂神社の祭禮には、所謂加茂の葵祭として必ず此葵を用ふる習ひあるより、別名を「かもあふひ」ともいへり。

加茂山のみあれむちかみ今こそは
　神の宮つこ葵とるらめ　　現存六帖・寓家

まつり過ぬれば、後の葵不用なりとて、ある人の御覧なるを、皆とらせ侍りしが、色もなく覚え侍しを、よき人のしたまふことなれば、さるべきにやと思ひしかど、周防の内侍が、

かくれどもかひなき物はもろ共に
　みすの葵のかれはなりけり

とよめるも世屈のみすに、葵のかかりたる、枯萎かよめるよし、家の集にかけり　徒然草

宿毎にかざすみあれの葵草
　神のしるしやときはなるらん　　新勅撰和歌集・読人不知　　現存六帖・前太政大臣

蓋し加茂の神事に葵を用ふることは、由来古き事にて、欽明天皇の御世より初まりしといふ。春月二葉の間より寸餘の花茎を抽き、其頂端に稍や鐘状をなせる暗紫色の花を開けども美ならず。

考證

畔田伴存は其著古名錄に於て、古へより京都加茂神社の祭禮に用ひられたる葵は、漢名蜀葵、今名カモアフヒといふものなる由記され、尚ほこれにつきて多くの説明を加へられたる中に、

加茂皇太神宮記曰、すべて加茂祭には葵・桂を冠にかけ給ふ、そのかみ神の夢の御つげ侍りし故に、社家より乗日に奉るとか申、則冠にかざし給て詣給ふ也、主人乘車翠持菅笠深沓をめし具す、上達部・殿上人をつらね社頭にて奉幣神拜あり、葵・桂を禰宜もちて奉ればこれを冠にかけ給ふ、東遊求子するが舞などある也。と出たり。

## ふぢばかま　蘭草　又らに　蘭草　（菊科）

Eupatorium chinense, L.

蘭草は古き世に蘭の文字をあてて、「らに」とも「ふぢばかま」とも呼びしより、往々蘭科に属する「しゆんらん」と誤ることあり。

いづこの野原にも生ひ出づる草にして、秋月蕚頂に群がり咲ける小さき花はすべて筒状花のみよりなり、淡き紅紫色を呈す。

葉はよき香りを放つにより、古来秋の七草の一つに数へて其色香をめでたり。

宿りせし人のかたみかふぢばかま
わすられがたき香に匂ひつつ
又の河あかてわかれしうつりかな
しばしとどむるふぢばかまかな　　古今和歌集・詞之　千匿

莖は通常二―三尺に達し、莖葉共に少しく紫色を帶べり。葉は相對して節部につき、三裂して複葉の如きものもあれば、又一個の披針形に止まるものもありて、何れも葉緣には粗大なる鋸齒を具ふ。かくていかさまあらあらしき姿の所もあれど、尙ほ花壇などに迎ふるに足る。

同じ野の露にやつるるふぢばかま　　紫式部
あはれはかげよかごとばかりも
きうくつにあるく花野はかたかたへ　　廣住
雨足入れて藤袴かな

## 考證

俗名蒐云、蘭一名薰、和名本草云、布知波賀萬、新撰萬葉別用藤袴二字。（和名抄）

フヂバカマをラニともよめど、蘭の字の音をかくいひなして、異名にはあらず。（俗與沖）

（前略）さて上に示せる和歌六帖二件の藤袴の唱和の御歌の外にも、藤袴をよめる歌三首を載て、題にはラニと書けるは、蘭の字音をなだらめたる言葉なり、又源氏物語藤袴の卷に、ラニの花のいと面白きをも給へりけるを、みすのへりよりさし入れて云々、といひて、歌にはおなじ野の云々、フヂバカマ云々とよめり、昔には平言にはなべてラニといへるなるべし。（比古波衣）

蘭（フヂバカマ）は葉麻に似て兩岐あり香よし、ほして彌うるはし、是れ眞蘭なり、野にあり、秋紫白花を開く、古歌にフヂバカマと多くよめり。（貝原益軒著大和本草）

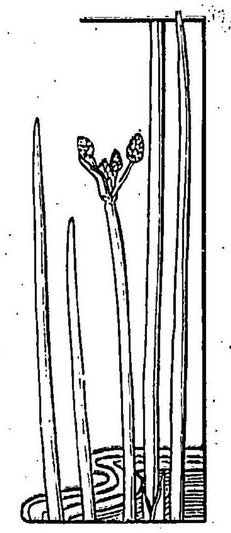
蘭草は宿根より苗叢生す、夏月籜にかくれ二旬餘も香氣ありて惡臭をさくべし、枝の末毎に傘の如く細小花多く集り開く、淡紫色なり、故に藤袴の名あり。（小野蘭山著本草啓蒙）

## ふとゐ　莞　又おほぬぐさ　太蘭

（莎草科）

Scirpus lacustris, L. var. Tabernaemontani, Trautv.

莞は沼澤などに自生せるものあれども、亦水田中に培養せらるゝ水草なり。莖の高さ三―四尺より五―六尺に達し、燈心草に比ぶれば少しく太き圓柱形をなせり。莖常葉は全く是を缺けるにより、淋しき莖は綠色を呈して其作用を代理す。



但根元に近き所には長き褐色の包莖葉あり。し疎なる穗狀をなして褐色の小花をつく。一花の大さは麥粒大にして、小さき鱗片の覆瓦狀に相重れるものよりなれり。夏月莖頂より數個の細き花梗を出操して席に織る。世にがまむしろと稱するもの即はち是なり。

河千島なくや河邊のおぼろ荒　　夫木和歌抄・清輔

すそうちをほひ一夜ねさせよ

かみつけのいならの沼の於保藺具佐　　萬葉集・人麿

よそにみしよはいまこそまされ

考證

唐韻云、莞可以爲席者也、漢語抄云於保藺。（和名抄）

太閤は俗にフトキとも、又唐藺とも、マルスゲとも、又佛杖とも云ふ、燈心草に似て



戰ぐ葉の少しは欲しき太閤かな　　南々

夏草にしては寂しき太閤かな　　碩布

蜻蛉のよき居所なる太閤かな　　素臣

甚大なり、深綠色にして高さ五—六尺あり、一窠より叢生す、池沼にあり、秋刈りてほし臥席とし圓席とす。（貝原益軒著大和本草）

按ずるに世にいふフトキは莞なり、莞和名抄に抄草類に載て席にするものなり。小野博は江浦草とオホキを一物として漢名莞をあてたれども、江浦草は和名抄水菜の部に載て芹菜の類となせり。（鹿持雅澄著萬葉集品物解）

## ふなばらさう　白薇　又みなしこぐさ　（羅摩科）

Cynanchum atratum, Bunge.

白薇は野生せる宿根草本なれども、其數割合に多からず。葉は稍や長き楕圓形にして、先端尖り、葉緣には鋸齒を具へず、短き葉柄を以て、相對して莖につけり。直立せる莖は葉と共に僅に毛茸あり。七—八月頃專ら莖の頂端に近き葉腋に、小さく紫黑色を呈して、深く緣邊の五裂せる花を、多く群り生ず。

ふた度たちし朝霧に　　心も空にまどひそめ

みなしと草になりしより　　物思ふ日の葉ぬしぞみ

けぬべき露の夜はおきて　　夏はみぎはにもえわたる

袂を袖にひろひつつ　　冬は花かとみえまがひ

このもかのもに降り積る
文みていでしみちはなほ
袋もかしこもあしれはふ

碧を袖に集めつつ
身の愛にのみありければ
下にのみこそしづみけれ

拾遺和歌集・源順長歌

## 考證

白薇、和名美那之古久佐、一云久呂久佐、一云阿末奈。（和名抄）
白薇、阿末奈、一名美那之古久佐、一名久呂女久佐。（本草和名）

## ふよう　木芙蓉　又芙蓉・花芙蓉　（錦葵科）

Hibiscus mutabilis L.

木芙蓉は支那の原産にして、古き世に我國に渡りしものなるが、其花のとりわけて麗はしきより、廣くゆきわたりて、今はいづこの庭園にも植ゑらるるに至れり。高さ通常三—四尺に伸び、葉は廣濶にして掌狀に淺裂し、長き葉柄を以て互生す。夏の暑き盛りに、淡紅色若くは白色にして、たをやめの滿面に笑を含めるが如き大形の美花を開く。されば古來此花を以てみめよき婦人に譬へたるためし少からず。例へば、平家物語の中に左の如き一節あり。

かかりし程に、中宮は月の重るに從ひて、御身を苦しくせさせ給ふ、一度笑めば百の媚ありけん、漢の李夫人、照陽殿の病の床もかくやと覺え、唐の楊貴妃、梨花一枝春の雨を帶び、芙蓉の風に萎れつつ、女郎花の露重けなるより、猶痛はしき御樣なり。

芙蓉見る心若くもならざりし　成美
見せたがるあるじの留守の芙蓉哉　多代女

花には一重のものと八重のものとありて、花の中央には花柱を包擁せる單體雄蕊特立す。專ら觀賞用として、池水のほとり、或は築山の一隅などに植ゑらる。

夕日相に殘るに竹樹涼しく、池の芙蓉風蒸りなにとなく見過し難き折からなり云々。

駿臺雜話

紅掌な上靡持てるふやうかな　宝松
日を帶びて芙蓉傾く恨かな　蕉村
月滿ちて夜の芙蓉の座りけり　曉臺
秋の心離れて見ゆれ花芙蓉　汝南

## へくそかづら　牛皮凍　又くそかづら　（茜草科）

Penderia tomentosa, Bl.

「へくそかづらは俗に「やいとばな」といひ、田舍の路傍などに自生せる蔓草にして朝顔の蔓の如く他物に絡みつきて上昇す、葉は相對して蔓につき、心臟形にして長さ二寸許あり。質柔かくして裏面には少許の軟毛を有し、長き葉柄を具ふ。花は四—五月頃開き、大さ三—四分許ある筒狀花にして、白色なれども筒狀部の內面のみ紫紅色を帶びて稍や麗はし。但葉と共に異樣の惡臭を放つによりて、多くの人に喜ばれず。古來「くそかづら」或は「へくそかづら」などいふ名稱あるも亦是が爲なり。

（クソカヅラ　糞花には「ひねほとれる屎糞」たゆることなく當仕へせん）

考證　萬葉集・高宮王

クソカヅラは今の俗にヘクソカヅラといふ、葉はガガイモに少し似て臭し、夏月葉間に花咲く、花はガガイモに相似たり、圓き實を結ぶ、大さ小豆の如し。（鹿持雅澄　萬葉集品物解）

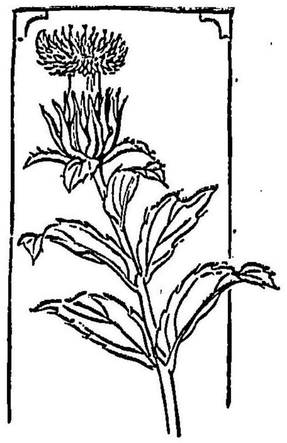
## べにばな　紅藍　又くれなゐ・すゑつむはな　異名・紅花・末摘花　（菊科）

Carthamus tinctorius, L.

紅藍はもと支那より舶來せしものにて、其花より紅を取るために畑地に植ゑらるる植物なり。夏の頃梢頭に細かき紅黃色の花を群がり生ずれども、充分に展開するに至らず。紅を製するものは、每朝早晨を以て其花を摘み取るにより、一名を末摘花ともいへり。

人しれず思へばくるし紅の
末摘花の色に出でなむ　古今和歌集・讀人不知

なににこのすゑつむ花の露の間に
うつろひやすき色をみすらん　源氏物語



莖の高さは通常四-五尺に達し、莖葉共に則多くして全形甚だよく蓼(アヰヤ)に似たり。古來染料に供するものにて、仙臺山形地方は有名なる產地なり。

ここには内の御邪にいとまなくなんとて、よき帛・糸・紬・黄草・藍・紡・紅藍などおほく來り給へれば、もとよりよくし給へりける邪なれば、いそがせ給ふ。　落窪物語

呉藍のやしほの衣あさなあさな
なるとはすれどいやめづらしも　萬葉集・藍人不知

紅の花にしあらば衣手に
しめつけもちてゆくべくおもほゆ　萬葉集・藍人不知

## 考證

紅藍久禮乃阿井、呉藍同上、本朝式云、紅花俗用之。(和名抄)

紅藍・紅花・ベニバナ・スエツムハナは今朝瓣をつみとれば明朝復出、此の如く數日にしてとりつくす、末摘花といふ、必ず早晨を以てする故に露に乘じて之をとる。(小野蘭山著本草綱目拾遺)

クレナヰ名の義は呉之藍にて、卽ち呉藍と書る字の如し、もと呉の國より渡り來りし故にいふなるべし。(加持雅澄著萬葉集品物解)

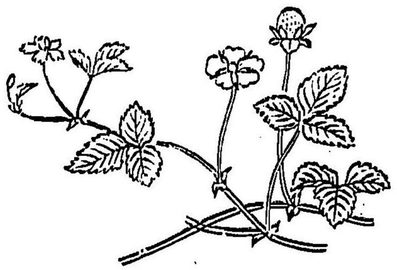
## へびいちご　蛇苺　又くちなはいちご　地楊梅　(薔薇科)

Duchesnea indica, Focke.

蛇苺はいづこの草野にも普く自生せる蔓草にして、莖は地上を這ひて長さ二-三尺に達す。古語に「くちなはいちご」といへるは、昔蛇のことをくちなはといひしにもとづき、地楊梅と記せるは、其果實の形狀よく楊梅(ヤマモモ)の實に似たればなり。

名おそろしきもの
繩・蟲・強盜又よろづにおそろし、ひぢかき雨・地楊梅・生靈・丸薬・丸薬・蕨・荊・棘・根・棘・いりずみ・牡丹・うしおに　枕草紙

葉は長き葉柄の先端につきて三個の小葉よりなり、各小葉は其形他の苺類の葉に等しくして、葉緣にはあらき鋸齒を具ふ。四-五月頃より長き花梗の先端に、一個づつ黄色の花を開く。花は五個の花瓣よりなり、蕚の外に尙ほ蕚に似たる五個の苞あり。花過ぎて後、直徑二-三分許ある球形にして紅色の漿果を結ぶ。



## ぼだいじゅ　菩提樹　又かくじゅ　覺樹　（桑科）

Ficus religiosa, Willd.

此樹の下に默然として釋尊の悟道に入れりといひ傳へて名高き菩提樹は、梵語にて覺樹とか道樹とかの意味ある由、本多厚二氏のいはれたり。印度の野山には此樹の巨大なるものの自生せるありて、幹の高さは二―三丈を過ぐること稀なれども、周りは二丈餘にも達し、高さの割合に周りの太きものなり。樹皮面には縱に深き切れ込みありて、一見せし所にては其有樣恰も數本の樹木を一束にたばねたるが如し。瓦生葉は直徑三―四寸許ある心臟形にして、葉緣は僅に波狀をなし、葉尖は特に細長く突出して其長さ二寸許あり、四時枯るることなし。花の形は無花果の花に似て大さ三―四分許あり。

聊も桐葉の夕べの涼すみやかに、法性の空に亘り、菩木の夜の甘の露は、終に覺樹の花散りぬ、望蟬の聲しき此世を厭ひては、夕顏の露の命を觀じ、若紫の袖を迎へ、采摘花の蓋に座せば、紅葉の賀の、秋の落葉もよしや唯、たま〳〵佛意に逢ひながら、榊葉のさして往生を願ふべし。

謠曲源氏供養



## ぼだいじゅ　菩提樹　又ぼだいし　菩提子　（田麻科）

Tilia miqueliana, Maxim.

此所に記載せる「ぼだいじゅ」は、英語にて Lime-tree と記し、獨逸語にて Linden といへるものにて、歐羅巴諸國にもあるものなり。我國にあるものは、益軒の說によれば宋國より傳へしものにて、爾來專ら寺院に植ゑ其果實を以て所謂菩提子の念珠を作りしが如し。但古代に菩提子の念珠と稱へしは、必ずこれのみには定まらず、廣き意味に用ひられしとも思はる。

兩人の物語實にもと聞き居て、耳を澄す所に、又是は內典の學匠にてぞあるらんと見えつる法師潔々と聞きて朝子を押除け、菩提子の念珠、爪繰りて申しけるは、佛天下の亂を案ずるに、公家の御祈とも、武家の御祈とも申しがたし、只因果の感ずる所とこそ存じ候へ。

今日はきはがしきやうに聞けば、何事もとどめず、これは結緣のためにとあり、黃金の珠數結に菩提樹の緒なん入れさせ給ひたりける。

落窪物語

此植物は蓖麻子に關係ある菩提樹に似たるより、等しく菩提樹と呼べるか。

幹の高さは二丈内外に達し、葉は長さ二寸許ある、卵圓狀三角形若くは心臟形にして、鋸齒を具へ、秋に入りて落葉す。特に奇怪なるは、長楕圓をなせる葉狀の總苞より花梗を出して、花を開くことなり。花の色は黄褐色にして、麻の實の如き果實を結ぶ。

## ぼたん　牡丹

又ぼうたん・はつかぐさ・ふかみぐさ　廿日草・深見草

Paeonia moutan, Ait.

（毛茛科）

牡丹は支那の原產にして、古き世に彼の國より渡りしものなるが、其花のうるはしきより廣く行きわたりて、今はいづこの園庭にも、植ゑらるるに至れり。葉の形は芍藥に似て、二回羽狀複葉をなせそもの多く、小葉には深き缺刻あり。五月頃梢頭に大なる美花を開く。花には一重のもの亦八重のものもありて、紅・白・黄・紫・咲き亂れたる樣は、實に妖艶滴るが如く、偏に阿嬌の笑めるが如し。されば古代より前栽に植ゑられしことは、榮花物語・玉の臺の一節に、

此の御塔の御前のかたには、また池の方に高欄高うしてそのもとに、さらび・ぼうたん・からなでしこ・らん・れんぐゑの花どもうつさせ給へり。

とあるによりても是を知るべく、尚ほ枕草紙・蜻蛉日記などにも、庭上に植ゑて喜びし由記されたり。又一名を廿日草といへるは、藤原忠通の詠に、

咲きしより散りはつるまでみしほどに
　花のもとにて二十日へにけり

とありてよりのことなりといふ。

名にしおはば咲け月月の廿日草　元
御簾に入は今盛りかや廿日草　正
ゆだんすな鼠の名にも廿日草　直
月川は袂中にもみよ廿日草　也
　　有
　　慶

馬琴の俳に牡丹は深見草といはんこそ正しき和名なるべけれ、今さま〳〵なる異名を負はずるはうるさし。と、かくありての故にはあらねど、古來深見草を詠める歌・文も亦少からず。

花檻前にえんて解いまだ即ず、鳥林下に鳴てなんだづきがたし、實も盡きぬは花の種色々なれやくれなゐは、いづれふかゆりふかみ草、御心よせに召れ候へとよ。
　　瞎曲・雲雀山

ふかみ草思ひそめてき君なれば
　戯も心にかけぬ間ぞなき
　　高倉院升遐記

人しれず思ふ心は深見草
花さきてこそ色にいでけれ

千載和歌集・貞保

考證

牡丹は皇國にても古へは藥劑にのみ用ひて、花を弄ぶことは聞えず、大治保延の頃などより宮中にも植立させ給ひけるにや、又廿日草といふ異名も古來ふりたり。

（瀧澤馬琴）

## ほとけのざ　佛座

Lamium amplexicaule, L.

（唇形科）

佛座は各地の路傍草野などに生ずる方莖の雜草にして高さ五—六寸乃至尺餘に達す。圓形の葉は鈍鋸齒を具へ、相對して節部につき尚ほ若干の間隔をへだてて上下に重なれる有樣は、蓮座をつらねたるに似たるより、かくは名附けたるものなるか。四—五月頃葉腋に紅紫色の小さき唇形花を開く。蓋し春の七種の一つなる「ほとけのざ」なるものが、正しく此植物に該當せるや否は甚だ苦しき次第なれども、他に然るべき考へも思ひ及ばねば、暫く貝原益軒の說に從ふこととはなせるなり。

考證

貝原益軒は此に記載せる植物を以て、賤民飯に加へ食ふ、是古に用ひし七種菜なるべし、といはれ。

後藤光生はホトケノザは蓮の根なり、葉を荷といふ蓮は實の名なり、中華には花の葉を佛座鬚と名く、此葉佛の座といへる異議あるべからず、とせられ。

松岡恕菴は佛座はレンゲバナといふ、小兒はゲンゲバナといへり、唐土にて碎米薺といへり、和爾雅に臭薺をホトケノ座と訓ず、何物を指すことを知らず。

などとある如く、此外にも諸種の異說多けれども、充分に吾人をして首肯せしむるに足る說に乏しきは、甚だ遺憾とする所なり。

## ほほづき　酸漿

又あかがちくたに

Physalis alkengi, L.

（茄科）

酸漿は通常人家の庭などに植ゑて、専ら其果實を愛賞するものなり。果實の袋の如き鮮紅色を呈せる部分は、花後蕚の益膨大してなれるものにして、肉質の球果を其内に取り圍めり。熟する時は全部赤く色づきて見事なり。紅熟せる球果は西洋諸國にても女兒等の玩び且生食することあり。謠曲・大蛇に、

顱はれ出づる大蛇の眼、年ふる角には霧かかり、松柏そびらに生ひ伏して、眼はさながらあかがちの光を放ち角をふりたてさも恐ろしき姿なれども、さすが心は密類の、舟にうつろふ御影を呑まんと、頭を舟に落し入れて、辟ひ伏したるこそ恐ろしけれ。

とあるはいかさま面白き書き振りならずや。花の形は茄子の花に似て小さく、白黄色を呈して花冠の縁邊僅に五裂す。六・七月頃開花す。毎年古き根より生ひ出て、高さ二・三尺に達し、廣卵形にして數個の粗大なる鈍鋸齒を具ふる葉を互生す。秋草紙に、

ひんがしはすずしげなる泉ありて、くたに、などやうの花ちゐて、春秋の草木その中に うちまぜたりとみゆ。又夏の方の前栽にさうび・くたになどやうの花のくさぐさをうゑて云々、

とあり、又古今和歌集物名及眞淵翁の歌に、

散りぬればのちはあくたになる花を
　おもひしらずもまどふ蝶哉

くたに咲く園生の木々の若緑
　夏このましき宿にもあるかな

などと詠まれたる「くたに」なるものは、屋代弘賢氏の說に從へば、此の所にいへる酸漿にて、同氏の說は甚だ據り所あること元よりなれども、夏の前栽に植ゑて、特に其花を賞する程のものにもあらねば、如何かと思はる。されど亦古代には、今の世の如く美しき西洋草花などもなければ、酸漿の花位にて用足りしやも知れず。兎に角記して聊か疑ひを存す。

## 考證

ホホヅキを神代記にカガチといへり、山かがちといふへびの名も、かれが目のカガチの如くてれるより名を得たるなるべし。（俗說考）

酸漿は一名カガチ・アカガチ・ヌカヅキ・ホホヅキなどいふ。（小野蘭山著本草綱目拾遺）

古今和歌集物名にクダニと詠めるはホホヅキのことなるべし、漢名酸漿・一名酢漿・一名酢菜・一名苦蔕子と本草和名に、又苦耽と嘉祐本草に見えたり、苦蔕の轉音なるべし、然るを苦膽・或苦丹・或龍膽・或牡丹・或木丹・或岩藤・或重藥などいへるは古人の

說なれども信じ難し。クタニは苦蔕の轉音にてホホヅキのことなり、たんのんをにといふことは、シオンをシオニ、せんをせに、といふに同じ、大和本草・本草綱目啓蒙異名分類に、龍膽の一名をクタニとなしあるによりて、クタニを龍膽とする人あれども、ひがごとなり、こはリウタンの字音よりして後におしあてたる臆說にて、あたらぬことなり、其證は龍膽は暮秋より初冬にかけて花咲き實を結ぶものにて、夏のものにあらず。（屋代弘賢古今要覽稿抄）

## ほほのき　厚朴

又ほほがしは・ほほ　朴・浮瀰羅物　（木蘭科）

Magnoeia hypoleuca, S. et Z.

厚朴は山地に自生多き落葉喬木にして、幹の高さ四―五丈に達す。葉は長さ一尺に餘れる倒卵狀楕圓形にして、葉面は綠色を呈すれども、裏面は少しく粉白色を帶び、梢の先端に群がりつける有樣は、恰も傘を翳せるに似たり。

わがせこがきさげてもてる保寶我之婆
あだかもにるかあをききぬがさ　萬葉集・東行

春月大葉の風に從ひて片々たる所は、綠の山野に一偉彩を添ふるものなれども、歌人は月をかくすとて却つて喜ばざるか。

はるひろみ岡邊にしだるほほがしは
下には月のもる夜半もなし　新撰六帖・知家

なにそこの西の軒端のほほがしは
山の端またで月ぞかくるる　新撰六帖・家良

五月頃葉心に直徑五―六寸許ある帶黃白色の花を開き、芳香甚だ高し。花は九個の花瓣と、多くの雄蕊とを具へ、花後大なる長楕圓形の果蕊を結ぶ。木材は其質櫻に似て緻密なるにより、諸種の用途に廣く用ひらる。古き世には、此植物を藥用に供せしことありと見え、榮花物語・浜水の段に次の如き一節あり。

關白殿參らせ給へるに、など御氣色の苦しげにおはしますぞと申させ給へば、典侍御前にて、此四―五日にならせ給ひぬ、御風にやとて朴などきこしめせど、おこたらせ給はずと申させ給へば、いと不便なる御事にこそとて、さぶらひ召して、守道召しに使はすべきよし仰せらる。

をほのなる三笠の森のほほがしは

神のひくてに幾世ますらん

考證

木釋藥性云、重皮厚朴和名保々加之波乃木。（和名抄）

厚朴保々加之波。（新撰字鏡）

厚朴順和名に保々加之波乃木と訓ず、中華より所來の厚朴亦保々の木の皮なり。（貝原益軒著大和本草）

浮爛羅勒は深山に多し大木あり、葉は槲の葉の如し、夏月枝上に一花開き、玉蘭花に似て大さ一尺に近く香氣多し。（小野蘭山著本草啓蒙）

## ほんだはら　馬尾藻

Sargassum enerve, C. Ag.

又なのりそ　勿聞藻・名告藻・莫語花　（褐色藻類）

馬尾藻は本邦の沿岸到る所に産する最も普通の海藻にして、日常磯邊に打ちあげられしものを拾ふは、いとたやすきことなり。又海面に漂へるものも少なからずして、漁村にては通俗に「もく」といへり。全長三—四尺許ありて褐色を呈し、莖の下部は根の如き形をなして海底の岩石などに附着し、細長き枝葉を分つこと彫し。

現存六帖・淨恩法師

葉の形は披針形にして柳の葉の如く、葉緣には細かき鋸齒を具ふ。圓形に近き紡錘形なる氣胞の多く小枝につける有樣は、恰も果實の如し。萬葉集には、

しがのあまのいそにかりほす名告藻の
なはのりてしをいかであひがたき

みさごゐるありそに生ふる勿聞藻の
よしなはのらじねやはしるとも

わたのそこおきつたまもの勿聞花の
いもとあれとここにありしと莫語花

とあり。遠藤博士の說に、此等は孰れも名を告ぐる勿れに掛けて詠みしものにて、古は男女始めて相契るに當りて、其名を告げ合ふことを以て、契を固むるの證としたる由或書に見えたれば、其心して此等の歌を解すべきなりと。

考證

ホンダハラはホダハラの轉にして穗俵の義なり、古名奈々利曾、之れに對する漢字は莫鳴菜なり、轉じて奈乃利曾、之れに對しては莫告藻・莫聞花・莫語花・名乘曾・名告藻・勿聞藻等あり、又神馬藻の文字あり、之れ古人の戲作なり、ホンダハラは近代に至

りて行はれたる名なり、之れに對する漢名として、馬尾藻の文字をあてたるは不當なり。（植物學雜誌遠藤吉三郎）

## まき　槙　又眞木

雪やこむ我や行かむの十六夜に
　槙の板戸もささずねにけり　　古今和歌集・讀人不知

山皿の槙の板戸もささぎりき
　　紅めし人を待しよひより
　　げにやげに冬の夜ながら槙の戸も
　　遲くあくるは苦しかりけり　　後撰和歌集・讀人不知

などの如く、古き時代の和歌に槙の板戸を詠めるものは、此外にも數多あり。蓋し今の世に「まき」即ち羅漢松を以て戸障子などを造ることは、殆ど聞かざる所なれば、此等の古歌に所謂槙とあるものは、或は他の何かの材の事にてはなきかと思ひ居たりしに、畔田伴存氏の古名錄に「爾雅曰披俗作杉即すぎ也倭名鈔にも披末木楽又杉一名也と云り、延喜式第四十に檜葉眞木葉冬五擔と云は杉葉也眞木は扁柏（ヒノキ）羅漢松杉三物同名也」とあるによりて、幾分か此邊の消息を辿るに好都合なりしと雖

大鏡・雜家

も、亦同書に「日本書紀曰杉者可以爲浮宮、檜可以爲瑞宮之材、被（マキ）可以爲顯見蒼生奥津棄戸將臥之具、と此證尺素往來に合して、杉と被は爲二物證也」とあるによりて見れば、再び其歸する所を疑はしむるものにて、今頓かに其何れなりとも定めがたければ、是につきては尚ほよく考ふべし。

三吉野やすずふく雪は埋もれて
　槙の葉はらふ雪の朝風　　風雅和歌集・國冬

## まこも　眞菰

又こも・かつみ・はなかつみ・菰・菰・菰・勝見・花勝見

Zizania aquatica, L.　　（禾本科）

眞菰は房總・濃・尾其他の平原の濕地・沼澤などに自生せる草本にして、早春宿根より生ひ出づる初めは其形筍の如く、皮滑くして豐かなる髓あり。南清地方にては此髓を食料に供するため、特に水田に栽培す。高さ三―四尺より七―八尺に達し、莖葉共に狹の如く、又高粱の如くにもあり。秋日莖頂より一―二尺の穗を出して、淡綠色の小花を綴る。西濃地方にては、端午の佳節に、ちまきと稱へて、葛餅を卷くに必ず此植物の葉を以てする習慣あり。古き世には其頃り取りたるものを以て、專ら鳫

蒋を織りたるが如し。

三島江の入江のまこも雨ふれば
いとど裏れて刈る人もなし
新古今和歌集・禪信

苗間・孤などの末みじかく見えしを、とらせたれば、いと長かりける、孤穢みたる船のありきしこそ、いみじうをかしかりしか、高瀬の淀には、これをよみけるなんめりとみえし。
枕草紙

時しもあれ水のみこもを刈りあげて
ほさで下しつ梅雨の空
千載和歌集・清輔

とも枕高瀬の淀に刈る孤の
かるとも我はしらでたのまん
古今六帖・讀人不知

むかひの江、緑深き松の蔭立、波の色もひとつになり、南山の影をひたきねども、青くして洗濯たり、洲崎所々に入ちがひて、蘆・勝見など生ひ波れる中に、ねし鴨のうちむれて飛ちがふさま、あしでをかけるやうなり。
東關紀行

あし根はひ勝見もしげき沼水に
わりなくやどる夜半の月かな
金葉和歌集・攝政左大臣

陸奥の淺香の沼の花勝見
かつ見る人に戀や渡らむ
古今和歌集・讀人不知



## 考證

陸奥の風習にて、カツミとは蒋をいふなり、昔アヤメのなかりければ五月五日には、かつみふきとて蒋を葺なり。（童蒙抄）

カツミはコモの異名か、六帖題にもコモにつぎてカツミを出したれば、こと物のやうなれど、ヌナハにつぎてネヌナハをのせたるたぐひとすべし。（曾契沖）

散木集長歌の一節に左の如き句あり。

花かつみ、かつみるさまは、まこもにて
名をかへけるもうらやましし

カツミとはコモをいふ、孤花をハナカツミといふ云々。（龍因歌枕）

菱の一種にしてカツミは實生り、コモは花咲けども實生らず、カツミの苗はコモより長大にして花後實生る、陸奥淺香の沼の名物なり、今は美濃及江戸にもあり。これ通志略に所謂彤蓬にして即ち孤米なり、陸奥・美濃よりこの實を剝み出す、仮に炊き病人の食とす。（小野蘭山著木環啓蒙）

加茂眞淵翁曰く花カツミは必ず蒋の事にはあらず。

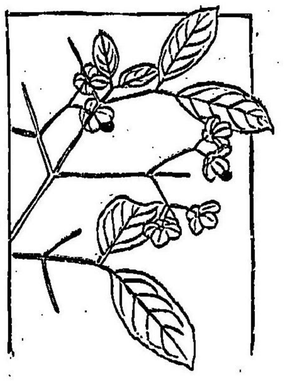
按ずるに、ハナカツミは勝見といふがもとよりの名にして、それに花のさきたる

を花勝見といふ。橘に花橘といふが如し、さてコモをカツミと云よし云へるは、もとよりカツミは菰の一種なれば、やがて直にコモともいへるなり。（鹿持雅澄著万葉集品物解）

カツミは菰の一名にて、ハナカツミとは菰の花咲きたるをいふべし、本草啓蒙にも菰米に當るをよしとすといはれたり。（井上通泰著万葉集考證）

## まゆみ　桃葉衛矛　又檀　（衛矛科）

Euonymus europaeus, L.



「まゆみ」は又「やまにしき」ともいふ。昔は梓と共に弓を作るに用ひられしものなるが、今日にても樺太及北海道のあいぬのあるものは、尚ほ此樹を以て弓を作る。

あだち野も雪ふりにけり神人の
　ひかぬまゆみの末たはむまで
　　現存六帖・忠實

幹の高さは丈餘のもの多けれども、亦よく二―三丈に達するものもあり。葉は長さ二―三寸の楕圓形或は卵狀楕圓形にして、葉緣には細かき鋸齒を具へ、相對して莖につけり。秋に入れば「ぬる」で、「はぜ」などの如くよく紅葉し、風情亦愛すべき所あり。されば古歌にも其紅葉を詠みたるもの少からず。

闕こゆる人にとはばやみちのくの
　あだちのまゆみ紅葉しにきや
　　岡花和歌集・堀川右大臣

片山のすそのゝまゆみ朝霧の
　たなびく見れば紅葉しぬらん
　　新撰六帖・爲家

引よせてみれどあかぬは紅に
　ぬれるまゆみのもみぢなりけり
　　古今六帖・貫之

春月長さ一―二寸の細長き花梗上に淡綠色の小花を開き、夏に入りて蒴果を結ぶ。果實の有樣は「つりばな」によく似て方形を呈し、上部四裂して、側面より見る時は矢筈の如き形をなせり。

### 考證

此の木、木理細にして其性ねばくしなやかにして、弓の木にはいとよろしき木なり、葉はタマツバキの如く、葉さき圓くしてタマツバキよりは大きく厚し、身木もタマツバキに似たり、皮をはげば内に白きあま皮ありて紙の如し、此のあま皮を去れ

ば木のはだ細にしてウッギなどの如くして白し、細なる花開きて實なる、十月の頃實を結ぶ、四つかどあり、四つにわれて中に赤黄色なる粒あり。まことの弓の木といふ義にて、其の樹の名をマユミノキと名付たるなり。（伊勢安齊著卷草）

檀の字はあたらず、マユミは衛矛の類にて、桃葉衛矛を以てマユミに充つ、山野共に多く產す、其の葉末秋より染はじめ、段々と上葉の色づくものなり、故に其紅葉餘木より久しくして、うは葉は殊に深紅なるものなり。（屋代弘賢著古今要覽稿抄）

## みかん　蜜柑　又かうじ柑子　（雲香料）

Citrus Aurantium, L. Subsp nobilis, Makino.

蜜柑は古き世に支那より移植せられたるものなるが、果實の味ひよき所より、忽ち廣く栽培せらるるに至りて、早くより大柑子、小柑子などの種類ありしこと、諸書に散見す。近來に至りて、品質良好なるもの更に多きを加へ、一般に柑橘類の中にては、味ひ甘くして、最も宜しきものなり。

水飲ませよといひつるばかりは甚ゆれど、その後の事はつゆ聞えず、この柑子得ざらましかば、この野中にて消え入りなまし、嬉しかりける男かな、この男いまだあるかと問へば、彼所に候ふと申す。　宇治拾遺物語

かなたの庭に大きなる柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まわりをきびしくかこひたりしこそ、すこしことさめて、此木なからましかばとおぼえしか。　徒然草

樹の高さは通常一―二丈位にして、餘り大木に作らず。葉は倒卵狀披針形なれども、中途に節ありて、一葉よりなれる複葉となれり。五月頃白色にして芳香にとめる五瓣花を開く。

この頃は伊勢にしる人をとづれて
たより色ある花柑子哉　夫木和歌鈔・惠鎮和尚

我國にては古來紀州蜜柑と稱へて、和歌山縣を以て第一の名產地となし、清國にても到る所に之が培養盛にして、良質のもの少からず。

### 考證

カウジ橘自古爲別物明也然るに後世包橘をカウジといへるは、後世の名にして古のカウジにあらざる也、カウジは即カンシ也、加無之は淡名柑にして今名ミカン

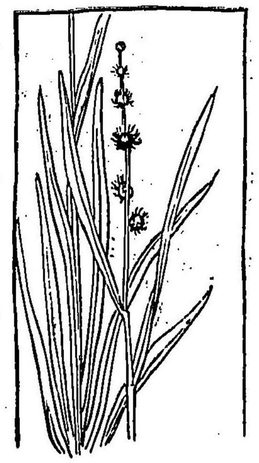
なり。(岷田伸右著古名錄)

山中信吉氏の增訂海南包譜にも、柑子の蜜柑にして、橘の柑子なることなど、詳細に見えたり。

## みくり　黑三稜　又三稜草　(黑三稜科)

Sparganium longifolium, Turcz.

黑三稜は沼澤及其附近の地に多く生ずる草にして、高さ二—三尺に達す。莖葉共に淸に似たる所ありて、夏日葉心より花莖を出し、其上端に五—六個乃至十個內外の白色の頭狀花を穗狀につく。其上部にあるものは雄花にして、下部に位するものは雌花なり。球狀をなせる果實は直徑二—三分許ありて、熟する時は黑色となる。



根元より叢生せる葉は、暑中刈り採りて陰干となし、之を以て繩を作り、或は馬の鞍下などを編むに甚だ强し。又粗末なる籠を編むこともあり。

今はは やとなちの池のみくりなは

くる世も知らぬ人にこひつつ
そこもやがて見んと昔ひて耶よせておりぬ、田舍だち耶そきて、馬の繪書きたる障子、
綱代屏風、三稜草の籠など、珠更に昔の事を寫し出てたり。　枕草紙
玉みくりうきにしもなとねをとめて　今物語
ひきあげどころなき身なるらん
かくれぬにおふるみくりのくり返し　新撰六帖・家良
下にや物を思ひみだれん
むさしなるさやまの池のみくりとそ　松葉集・讀人不知
引けばたえすれわれやたえする

現存六帖・為家

## みづめ　又梓　(樺木科)

Betula ulmifolia S. et Z.

「みづめ」は又の名を「よぐそみねばり」ともいひ、信濃・甲斐地方の山地に多きものなれども、亦其他の各地にも產する落葉喬木にして、幹の高さ二—三丈に達す。材には少し臭氣あれど、質ねばくして弓材に適へば、古代梓弓を造るには專ら此樹を用ひたり。

あづさ弓張だちしより年月の

射るが如くもおもほゆるかな
　　古今和歌集・朝臣

そるまでは思みしかども梓弓
　　誠の道に入るぞうれしき
　　平家物語・瀧口入道

梓弓梓の山邊の櫻こそ
　　戀しき人のかたみなりけれ
　　今鏡・御製

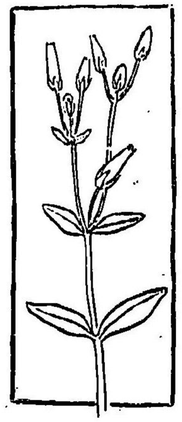
葉は長き心臓形にして葉緣には細かき鋸齒を具へ、互生にして裏面の葉脈上に毛茸を有せり。花には雌雄の別ありて、雄花は長さ一寸許の穗狀花なれども、雌花と共に美ならず。熟する時は、細かき鱗片の相重なれる毬果となる。

## 考證

古代專ら弓を作るに使用せられたる梓は、現時の如何なる植物に相當せるかを定むることは、頗る困難の事にて、これにつきては古來有名なる故實家、或は本草家などの間にも異說甚だ多し。一例を擧ぐれば、伊勢貞丈は弓材考にて、貝原益軒は大和本草にて、共にキササゲを以て是に中るものとなし、小野蘭山は本草綱目啓蒙にて、畔田翠山は古名錄にて、共にアカメガシハを以て是に中るものとなせり。然るに近來白井博士は、各種の方面より最も愼重に考證せられたる結果として、終に此に肥戟せるミヅメ說を創立せられたり。事の次第は植物學雜誌第二百五十八號に掲載せられたれども、長文に亘るを以て此の所には略することとなせり。尙ほ親しく同先生につきて是を糺すに、該說を公表せられて後、伊勢大廟の菜神宮より、古代大廟に用ひし梓弓の古き物を發見して、特に先生の手元に送られし由にて、先生は直に是につきて精細なる顯微鏡的組織を調査せられたるに、果して其構造のミヅメ材と相一致して、益其說の中れるを確にするを得たりとなり。

## みみなぐさ　卷耳　又耳菜草・耳無子・耳菜　（石竹科）

Cerastium vulgatum, L. var. glandulosum, Reg.



卷茸は路傍・畑地などに自生せる雜草にして莖葉共に柔かき毛茸を密生す。莖の小なるものは大さ四-五寸に充たざれども、大なるは尺餘にも伸びて、地上に平臥する傾きあり。葉は無

柄にして節部に對生し、長さ五-六分許ある卵形或は卵狀披針形にして、質柔かく全緣なり。春より夏にかけて小さき白色の花を開く。花は緣邊の二裂せる五個の花瓣よりなり、大さ二-三分許ある淡褐色の光澤ある蒴果は、其先端淺く裂開し、内に數個の細微なる種子を藏す。

名にしをへばあはれとぞ思ふ耳なる草　千載

よの遊き事もきかずやあるらむ

見も知らぬ草を子供のもてきたるを、何とかこれをばいふといへど、とみにもいはず、いさなととれかれ見合せて、みみなぐさとなんいふと、いふもののあれば、むべなりけり、きかぬがほなるは笑ふに、又おかしげなる菊の出たるをもて來たれば、

摘めどなほ耳菜草こそつれなけれ

あまたしあれば菊もまじれり　枕草紙

といはまほしけれど、聞いるべくもあらず。

## みる　水松

又みるめ・うきみる・うみまつ・みるぶさ　海松・浮海松　（綠色藻類）

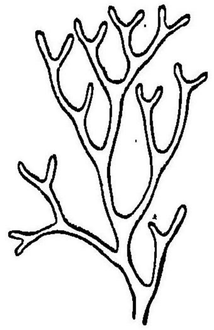
Codium mucronatum, j. Ag.

水松は沿岸に近き淺き海底の岩石などに附着して生ずる海藻にして、通常六-七寸位の大さに達す。他物に附着せる所は一本なれども、順次叉狀に分岐し、各枝の末端は鈍圓をなして終り、全形稍や總の如き形をなせり。

海松ふさやかかれとてしも寺の尼　嵐雪

海松ふさや貝取出双を蜑にかる　北角

海松の香に杉の風や初瀬山　北角



實質は沐浴海綿を一層緻密にせし如きものにて、多量の水分を含み、全體一樣に濃綠色を呈せり。

早朝海岸を散歩する時は、此ものの浪に打ちあげられて、ここかしこにすたれたるを拾ふことあり。少しく香氣ありて、古き世には食料に供せしことあれど、今の世には多く用ひられず。

蜑の刈るみるを選ふにてありしだに
今は渚によせぬ浪かな　新勅撰和歌集・藤原

みるめ刈る潟やいづこぞ漕ぎしてい
我れに教へよ蜑のつり舟　伊勢物語

こりずまの浦にかづかむ浮海松は
　波騒がしくありこそはせめ　　大和物語

正月なれば京のねの日のこといひ出でて、小松もがなといへど、海中なれば難しかし、ある女の書きて出せる歌、

をぼつかなけふは子の日か蓋なくば
　海松なだに引かましものを　　土佐日記

考證

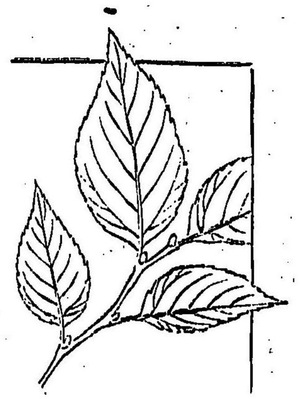
海松見延喜臨時大嘗祭、圖書寮民部省主計寮大藏省宮內省大膳職內膳司主膳臨等式、又見賦役令萬葉集云云。（箋註和名類聚抄）

## むくのき　樸樹　又むく　椋　（榆科）

Aphananthe aspera, Planch.

樸樹は山野に自生せる落葉喬木にして、大なるものは高さ五—六丈周り丈餘に達す。樹皮淡灰褐色を呈し、所々より不定形にして鱗片狀をなせる薄片剝落す。葉は互生し、卵狀長楕圓形にして先端尖り、長さ二—三寸許ありて葉緣には鋸齒を具ふ。葉面は特に粗糙なれば、古來木賊と共に器物其他の物を磨くに用ふ。





花は單性にして四—五月頃新葉と共に開く。雄花は淡黃色の小花にして、雌花は大さ一—二分許の球狀花なり。十一月頃大豆の如き紫黑色の核果を結ぶ。

九月つもごり、十一月一日の程、空うちくもりたるに、風のいたう吹くに、黃なる木の葉どもの、ほろほろとこぼれおつる、いとあはれなり、櫻の葉、椋の葉などこそおつれ、十月ばかりに、木立多かる所の庭は、いとめでたし。　枕草紙

悲後堀外しけること有りけり、道に堂あるに、椋の木有り、その木に六歲ばかりなる小童のぼりて、むくを取て、くひけるに云々。　古今著聞集

惡源太を始とし、十七騎の兵ども、大將軍に目をかけて、大庭の椋の木を中にたて、左近の櫻右近の橘を七八度まで迫ひまはして、組まん組まんとぞ揉うたりける。　平治物語

故中御門の藤原中納言家成卿、其時は未だ播磨守にておはしけるが、邸にとりて花やかにもてなされしかば、とれも五節には、播磨守は木賊草か、椋の葉か、人の綺羅を研くは、とぞはやされける。　平家物語

尙も天下の安危國の治亂を問はんとする所に、俄に猛火燃え來りて、座中の客七轉八倒する程に門外へ走り出づると思ひたれば、夢の醒めたる心地して、火内の遺跡、大庭の梧の木の木に、朦々としてぞ立ちたりける。　太平記

考證

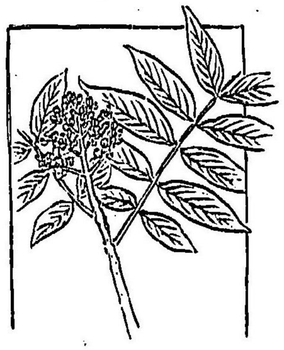
ムクの葉は細工する人は先づ斧打にしたる木をとりて、重て、てうの打をして、次にかんなをかけて、上をみがくにも、さめ、トクサもつかひて後、ムクの葉にてみがき終り侍る也。（比況集）

掠非葉山吹に似たり葉にいらあり、用て木竹、骨角をみがく、木賊の如し、實の大さ棟子より小なり、十月に熟して色黑く味甘し食すべし。（貝原益軒著大和本草）

## むくろじ　無患樹　又もくれんじ　木練子・木槵樹・木槵子　（無患子科）

Sapindus Mukurosi, Gaertn.

無患樹は各地に生ずる喬木にして、高さ數丈に達す。葉は羽狀複葉にして、小葉の數は通常六―七對許あり。革質にして全緣、披針狀長楕圓形なり。五―六月頃梢の先端に圓錐花叢をなして、五個の花瓣よりなれる小花をつく。所謂むくろじなる乾果を被包せる外皮は、多量の石鹼質を含有するを以て、洗濯用として效あり。種子は質極めて堅く、外面平滑にして黑色を呈す。古來穿孔して念珠を造るに用ふ。



とれも今は昔、中納言師時といふ人おはしけり、その御胖に、珠の外に色黑き黑染の衣の短きに、不動袈裟といふけさかけて、木練子の念珠の大なる、くりさげたる聖法師入り來て立てり。　宇治拾遺物語

又天神は、一切衆生現當二世の爲め、五部の大乘經を書き供養して埋まれたり、其軸より木槵樹の木生ひ出でたり、其木の實を取り數珠とし、念佛百萬遍申さば、往生疑ひあるまじきと永つて夢醒めぬ、なんぼう有り難き御夢相候ふぞ。　鶴山・道明寺

考證

欒漢語抄云木欒子、無久禮迺之乃木。（和名抄）

欒華和名牟久禮之。（本草和名）

ムクロジの外モクゲンジ即ち欒樹と稱する植物あり、其種子の形前者より少しく小なれども、無患子科の植物にして全形よくムクロジに類似せり。但種子は大

さ二-三分許にして自然に孔あり、無患子と共に念珠を造るに用ひられしかど、其種類極めて少なし。

## むらさき　紫草

Lithospermum officinalis, L.

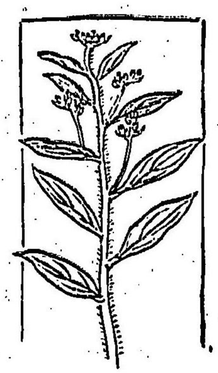
紫のゆかりの草をとひわびて　　新葉和歌集・入道前關白左大臣

つゆわけそむる武藏野の原

今は武藏野になりぬ、珠にをかしき所も見えず、潤も砂子白くなどもなく、こひぢのやうにて、紫生ふと聞く野も、唐衣のみ高く生ひて馬に乘りて弓もたるすゑ、見えぬまで高く生ひ繁りて、中をわけ行くに、たけしばといふ草あり。　　更科日記

などと、古へより武藏野のむらさきとて名高き紫草は、必ずしも武藏野のみに限らず、普く各地の山野に生ひ出でて、高さ二尺餘に達する草なり。莖葉共に少しく毛茸を生じて粗糙の感あり。葉は長楕圓狀披針形にして先端尖り、全緣にして互生す。夏日莖頂に小さき白色の花を開けども、餘り見ばえあるものにもあらず。

（紫草科）





紫草の名は、其根のいたく紫色を帶べるより起りしものにして、昔は染料に用ひたることもあり。

戀しくばしたにを思へ紫の　　古今和歌集・詠人不知

根ずりの衣色につなゆめ

つくま野に生ふる紫衣しめ　　万葉集・遊女郎

染だきずして色にてにけり

むらさきの色こき時はめもはるに　　古今和歌集・業平

野なる草木ぞわかれざりける

此の植物は、元來さまで麗はしきものにはあらねども、其名のゆかしう聞ゆる所より、いつの頃よりとなく、もてはやさるるに至りしものなり。されば兒女等の名前を撰むにつけても、おろそかにせざるがよし。

## めだけ　含朶竹

又なよたけ・なゆたけ・弱竹・名湯竹・篠竹

Arundinaria japonica, S. et Z.

（禾本科）

古き世にいへる弱竹なるものが、今日いふ所の「めだけ」、即ち關東地方の俗に篠竹と稱するものに當たることは、片山直人氏の說にして、比較的信ずべきに似たれば、

此の所にても暫く同氏の言に從ふこととはなせるなり。此竹は東海道の沿岸諸國に最も多く産し、東京及其附近にて園庭に植ゑられたる竹といへば、大方此種のものなり。

竿の高さは丈餘に達し、節間長く、初生のものは特に白粉を附け、籜は年を經て尚ほ落ちず、故に又一名を皮竹と稱することあり。質柔かき方なれば、僅かの雪にもよくたはみ且折ることあり。「なよたけ」の名も此なよなよとしてしなやかなる意より起りしといふ。節部につける枝は細くして群がり生じ、葉の形は「まだけ」・「もうさう」などに比ぶれば、遙に細長くして、先端特に尖れり。

あだにみし夢か現かなよ竹の　　吉今著聞集
をきふしわぶる想ぞくるしき
わが宿のみぎはにおふるなよ竹の　　赤染衛門集
はちすと見ゆるおりもありけり
花の色も常磐ならなむ弱竹の　　拾遺和歌集・元輔
長き世にをく露しかからば
あふことをかたみにこふるなよ竹の　　大和物語
たちやすらふときくぞかなしき

## もちつつじ　又いはつつじ　（石南科）

Rhododendron ledifolium, Don.

「もちつつじ」は躑躅類の中にて最も早く花を開くものにして、初春新葉に先ちて山腹などに淡紅色若くは白色の花の咲き出てたる所は、田舍に於ける一種の眺めなり。花は「さつき」・「きりしま」などより大きくして、花梗と蕚とには粘液を分泌する腺毛を密生し、指端などによく粘着するを以て、「もちつつじ」の名あり。

だんごよりましたる花かもちつつじ　　親重
花よりやげこの日につくもちつつじ　　春可
うす色に花もつきけりもちつつじ　　良春
紫の色やあづきのもちつつじ　　眞徳
蓋人と雖もさぞかし岩つつじ
もちとさけよと思ふ此頃　　鼻成

幹の大なるものは高さ七―八尺に達し、葉は多く倒卵狀披針形にして毛茸を密生し、枝梢の先端に群がりて生ず。古き世に「いはつつじ」といひしは、此植物の專ら絶壁の岩陰などに生ふるものなるによれるか。

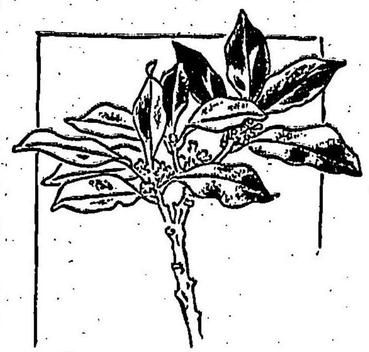
岩つつじ折りもてぞ見るせこがきし
　紅染めの色に似たれば　和泉式部

思ひいづる常磐の山の岩つつじ
　いはねばこそあれ戀しきものを　古今和歌集・讀人不知

祝かしてくれない皿の岩つつじ
　火ともし頃の旅ぞ物うき　白人

## もちのき　鵲木　又細葉冬青・冬青木　（冬青科）

Ilex integra, Thunb.



鵲木は暖國の海岸に近き山地に自生せる常綠喬木なれども、亦往々庭木として植ゑらるることあり。葉の形は楕に似て平滑なれども、葉面平らかならずして、僅に波狀のうねりあり。雌雄株を異にして、五月頃花を開く。雄花は其の形小さく帶黃白色にして、葉腋に群がりつき、雌花も亦小さき花にして葉腋につけり。樹皮よりとれる鵲は、其質やまぐるまの木より製せるものに比ぶれば品劣れり。

又神の中島にもちの木あり、貞保親王の木の下に、岩の上に座し給ひて、常に笛を吹かせ給ひけり、又四面のついぢの上には、罌粟をひしと植ゑられたりければ、花の盛りには色々さまざまにて、錦を山におほへるに似たり、是によりて花山の號はありと申しける、　古今著聞集

## もづく　海藻　又水雲　（褐色藻類）

Megoloe decipins, Sur.

水雲は安房・三河・若狹などにて沼の如き波靜かなる淺海に、多く產する海藻の一種にして、全體褐色を呈せる細き糸の如きものなれども、不規則に枝を分ちて、海水と共に漂へり。若し是を指間に觸るる時、頗る粘滑の感じあるは、體の全面に天鵞絨の如く、顯微鏡的絨毛を密生せるによる。新鮮の物を三杯酢に浸して味ふに、一種の香氣ありて上戸の口に適ふ。大和本草に、海藻、本草時珍云縕亂糸也、其葉似之故名、正月取たるはわかく柔にして良しと。

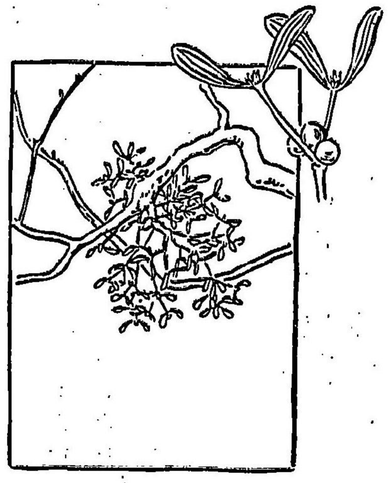
公事根源の供若菜段に、

若菜十二種を供することあり、其くさぐさは若菜・はこべら・菅草・蘩蔞・蓼・水蓼・芝・蕗・水芹・蕪云々。

## やどりき　槲寄生　又ほよ・和木・寄生木　（槲寄生科）

Viscum album, L.

槲寄生は楡・槲・櫟・椈などの樹枝上に寄生する植物にして、莖は通常一―二尺位に伸び、質軟かく、黄綠色を呈して、三四寸毎に節あり。規則正しく叉狀に枝を分つこと繁ければ、秋冬の候遠くより是を望む時は、一團の鳥の巢の如くに見ゆ。葉は枝の先端にV字形をなして對生し、革質にして厚く、篦の如き形をなせり。雌雄株を異にして、三―四月頃葉間に淡黄色の小花を開く。漿果は其形南天の果實の如く、紅黄色を呈して美し。



あしびきの山のこぬれの保與とりて

かざしつらくはちとせほくとぞ　　万葉集・家持

宿木は色かはりぬる秋なれど
　むかし忍えてすめる月かな　　源氏物語・東屋

何時か我れ假初にだに宿木の
　ねもみぬものをうき名たつ覽　　續古今和歌集・行家

梅の木に猶やどりぬや梅の花
　寄生のいらぬ所に若菜かな　　芭蕉　一十竹

泰西諸國にては十二月二十五日、クリスマスの裝飾用として、缺くべからざるものなり。

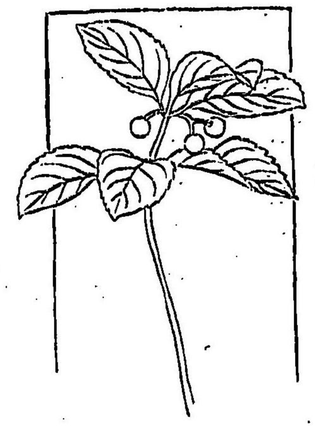
### 考證

ヤドリキをホヤといふこと和名抄にもみえたり、萬葉にはホヨと詠めり。（倚奬神）

## やぶかうじ　紫金牛　又やまたちばな・山橘・不地木・藪柑子　（紫金牛科）

Ardisia japonica, Bl.

紫金牛科は山林樹陰の地に自生すれども、亦多く前庭の飛び石の傍などに植えらるものなり、高さ五―六寸乃至一尺許の小さき灌木にして、少しく横臥して群がり



生ず。葉は莖の先端に多くつき其形茶の葉に似て、葉緣には細かき鋸齒を具へ、四時緣のかはることなし。

いはがれは緣もあけもはへ色の
山たちばなのときはかきはに
現存六帖・信實

我が戀を忍び兼ては足曳の
山たちばなの色に出ぬべし
古今和歌集・知則

夏月葉腋に咲ける花は甚數少なく、合瓣花冠は稍や白色を帶びて赤き斑點あり。南天の實に似たる漿果の、雪間より現はれて紅くつやつやと照れる有樣は、緣の葉と共に淋しき冬の庭の面に、一種の趣きあり。

この雪のけのころときにいざゆかな
山橘の實のてるもみむ

萬葉集・家持

此の植物は交讓木と共に、其葉の常緣なる所に目出度き意味をもたせて、年首の賀婚禮の際の銚子に添ふるなど、すべて喜ばしき印に用ひらる。

御文あけさせ給へれば、五寸ばかりなる卯槌二つを卯枝のさまにかしら包みなどして、山たちばなひかげ夢門きなどうつくしげに飾りて、御文はなし。　枕草紙

又古き世に髮をぎの際「山すげ」に添へて用ひしも、皆目出度き印ならざるはなし。

ふりにける卯月のけふのかみそぎは
山たちばなの色もかはらず

新撰六帖・知家

## 考證

山橘は今いふヤブカウジといふものにて、本草啓蒙に紫金牛をあてたるをよしとす、本草紫金牛集解に、葉如茶葉上緣下紫結果圓紅色如圓朱根微紫色とみえたり、又大和本草に平地木をあてたるもよし、平地木即ち紫金牛なり。（群本山豆流著萬葉集考證）

平地木和名ヤマタチバナ、古歌にもよめり、小樹高さ數寸に過ぎず、葉は枇杷葉に似て小にして厚し、世俗多く庭にうゑて石に伴はしむ。（貝原益軒著大和本草）

ヤマタチバナは今いふ鹽柑子なり。萬葉に多く讀み、六帖にも草の處に此の題多く見えたり。又曰清少納言の枕草子には木はといふ條に山タチバナをのせたり、おぼつかなき事なりと契沖もいへり。又安藤爲章の年山紀聞四ヤマタチバナ

にも、滑少納言をおぼつかなしといへりとあり。（難波江）

山橘は鈴柑子の事なり。山橘を牡丹なりと思ふはたがへり。又曰、此の他古今集十三、新撰六帖五、夫木鈔二十八、等に見えたるヤマタチバナの歌も、皆平地木をよみたるなり。（雅語乃琴）

## やぶらん　麥門冬　又やますげ　（百合科）

Liriope graminifolia, Baker.

麥門冬は成るべく樹陰深き濕潤なる山地に自生せる常綠草にして、全草しゆんらん」によく似たり。葉は根元より多く叢り生じ、長さ一—二尺許ありて、枕草紙には、

麥門冬・山菅・女菰・はまゆふ・葉・葉の風に吹きかへされて裏のいと白く見ゆるをかし。

と記されたれども、葉の裏面の特に著しく白色を呈するといへる程にもあらず。葉心より抽ける細長き花莖は、長さ一尺四—五寸もありて、夏月其先端に淡紫色の小花を疏穗狀につく。漿果の形は南天の果實の如く球狀なれども、熟する時は黑色を帶ぶ。「しゆんらん」の如く庭前の飛び石の傍らなどに伴はしむるによきものなり。

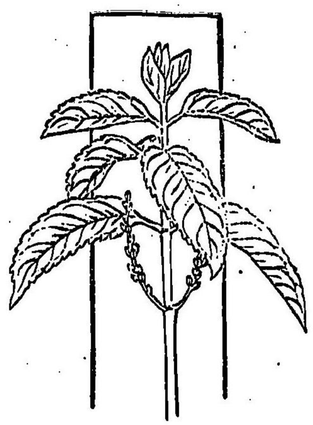
### 考證

大葉の麥門冬はヤブランといふ、樹下竹陰及路傍に多く生ず、夏に至りて叢葉中數莖を抽づ、高さ一尺餘、小花數多く綴り長柄をなす、花は數多けれども實を結ぶこと少なし、實は大さ南天の實の如し、秋になりて熟して黑し。（小野蘭山著本草啓蒙）

## やまあゐ　山藍　又やまぬ　山野・山間　（大戟科）

Mercurialis leiocarpa, S. et Z.

山藍は太陽光線の透過すること少なき樹林陰地を好みて生ずる常綠草本にして、莖の高さは通常一—二尺內外なり。葉は節部に相對して附き、長さ二—三寸許ある卵形或は廣楕圓形にして先端尖り、葉緣には淺き鋸齒を有す。葉柄は細くして長きもあり又短きもあり。雌雄異株若くは同株にして、五—六月頃細長き花梗の先端に、見るも哀れなる黃綠色の小花を着く。昔より汁液を搾りて、青色の染料に供し



山あゐの袖の月影さよふけて
霜吹きかへす加茂の河風　　風雅和歌集・為成

母公其色は何と云ふ色ぞと尋ねさせ給ひけるに、山まえ染とか申侍る、しかも山まえ染は假の山、實は山藍染のよしなり。　　因幡閑話

御園生に祝ひてまきし山あゐを
けふの袂にすりあへりけり　　眞淵

たることあれど、もとより藍成分に乏しければ、以て藍とするに足らず。

山藍もてすれる衣にふる雨は
かざす櫻のちるかとぞみる　　新勅撰和歌集・三條入道左大臣

ゆふたすき千年をかけて見し夜の
山藍の色は變らざりけり　　新古今和歌集・貫之

此植物は其數甚だ少きが上にも、生存競爭場裡に於ける劣敗植物の一好例にして、年々其數を減ずる傾向あるはいと心細き限りなり。



## やまぐは　山桑　（桑科）

Morus alba L. var. stylosa, Burnm.

山桑は山地に自生する喬木にして、大なるものは高さ三—四丈に達することあり。畑地に栽培せらるる桑の原種と見做すべきものにして、莖・葉・花・實すべて是等の桑と殆ど異なる所なし。只果實は概ね小さくして、いづこにも數多くあるものにもあらず。葉は以て蠶を飼ふことを得べく、樹皮の纖維は製紙の原料となすべし。又材は質粘くして古代弓を作るに用ひたることは、左の一節によりて知らる。

折節天下に童部歌を歌ふ事あり、山桑の弓生柄の矢を以て此國を滅すべし、とぞ歌ひける、久しからずして男一人出で來り、山桑の弓生柄の矢をぞ賣りたりける、是をきき聞ゆる事にこそとて、件の男を搦め捕りて、土の籠に籠められ云々。　　源平盛衰記

## やまつつじ　山躑躅　又つつじ・をかつつじ・ひとりぐさ・紅躑躅　（石南科）

Rhododendron indicum, Sw. var. Kaempferi Maxim.

「やまつつじ」は山野に自生せる小灌木なれども、又池水のほとりに植ゑ、或は庭の飛び石の傍などに移して、人皆其花の麗はしきを愛賞す。

鄰間咲いて石移したる趣しきよ　　蕉村

旅館の夕紅につつじかな　　蕉太

俗謠にも『山で赤いのはつつじにつばき』などとある如く、此花の山野に赤く咲き出でたる有樣は、變化少なき山路の行客にとりては興ある眺めなり。

くれなゐのふりての色のなかつつじ　　藤原伸實

妹がま袖にあやまたれけり

いり日さすをちの岡邊のをかつつじ　　堀河院次郎百首

ゆふくれなゐに色ぞまされる

花さけば秋かとぞ思ふひとりぐさ　　藥師寺

みるにもみぢの色とさかへば

莖の高さは通常一―二尺位を出づること稀にして、寧ろ横に廣がる氣味あり。莖葉共に毛茸を密生す。四―五月頃、もちつつじに後れて枝の先端に花を開く。花の色は通常赤色なれども、亦白色のものもあり。

## やまなし　鹿梨　又つまなし　山梨

Pirus Taschonakii, Maxim.

〔薔薇科〕

「やまなし」は山地に自生せる落葉喬木にして、大なるものは高さ二―三丈に達す。梨の原種にして、古き世には庭園にも植ゑて其花を愛でたるか。

枝に葉に露をばをびて雨にけさ　　春海

花のひもどく庭のやまなし

さてははや軒のつまなし咲にけり　　喬木集

菲の門をとぢてみえつつ

枝梢には長さ一―二寸許の太くして尖鋭ならざる刺を有す。葉は其形梨の葉に似たれども、それより少し小さくして、梢或は古き刺の先端に發生し、葉緣には細かき鋸齒を具へ、裏面には褐色の毛茸を有す。春月梨の花に殆ど異らざる白色の美しき花を開く。

いろ〳〵に春のもやうを染め出す　　眞淵

中に白地のつまなしの花

大和路も霞の海となりにけり　　明代

今や咲らん山梨の花

梨果は直徑五―六分許ありて、熟する時は黃色を呈す。味ひ少し澁く、梨に比して遙に劣れりと雖も、亦食すべし。

尙ほ此植物を人意にあてはめて、面白き言葉使ひをなせるためしには、次の如き歌

文あり。

實に何のさはり所かはあらん、ほどもなくて、かかる御住居のかひなき、山なしの花ぞのがれん方なかりける。

源氏物語・總角

世の中をうしといひてもいづくにか
身をばかくさん山梨の花

近江御息女歌合

今少し腹たて惑はし給へ、このことばはなぞ、としごろはかうや聞えつる、いかで堪へ給へるとの給へば、女、山梨にこそはと笑ふ。

落窪物語

## やまのいも　薯蕷　又いもづる・むかご・自然生薯蕷・零餘子　（薯蕷科）

Dioscorea japonica, Thunb.

薯蕷は野山に多き蔓草にして、蔓は他物に纏ひつきて高く上昇す。葉は蔓に向つて相對し、長き心臟形にして先端細長く尖れり。夏の初め、葉腋に不規則なる球形をなせる零餘子と稱する肉芽を生ず。其樣聊か奇怪にして人の注意を惹く。されば今物語に、

近きに寺の蔓の遣ひかかりて、ぬかごなどの走ひたりけるを見て光淸、

はふ程にいもがぬかごになりにけり

といひたりければ、程なく小大進、

今はもりもやとるべかるらん

とつけたりけるも、面白かりけり

とあり。又源平盛衰記中の一節にも、

保安元年白川院熊野御參詣なり云々、道の傍にやまのいもの紅枝に懸り、零餘子玉を連て生ひ下り、いと面白く散覽ありければ云々。

などとも出でたり。方丈記には、

或はつばなをぬき、岩なしをとり、又ぬかごをもり、芋をうむ、或はすそわの田居に刈りて、落穗を拾ひてほぐみをつくる。

と記して、山家の小供等の遊び樣を現はせる間に、食用に適することをも自らもらされたり。雌雄異株にして、夏月淡綠白色の小花を綴り、乾果は大なる三個の翼を具へたり。

地中に深く埋もれたる根莖は、細長くして、俗に「やまのいも」と稱へ、茹て食し、トロロ汁などに料理して、多くの人の嗜む所なり。

## やまはぜ　山櫨　又はじ櫨

Rhus sylvestris, S. et Z.

（漆樹科）

「やまはぜ」は又「やぶうるし」ともいへり。喬木なれども幹は大ならず、專ら山野に自生するものなり。凡そ櫨漆類の植物は、秋に入りてよく色づき、殊に櫨の紅葉はとりわけて見事なれども、此樹は採蠟の目的を以て栽培せらるるもの多ければ、古歌などにて山野に自然の有樣を詠ぜしは、寧ろ「やまはぜ」にあらずやと思はる。

山里のしづがかきねのむら竹に
もりて色づくはじ紅葉哉　　現存六帖・藤家

ありま山しぐるる峰のときはぎに
ひとり秋しるはじもみぢかな　　夫木和歌抄・匡房

山深み窓のつれづれとふものは
色づきそむるはじの立枝　　四行上人

然れども亦平家物語の中に、

去永安の頃ほひは、御年十歳ばかりにやならせおはしましけん、位りに紅葉を愛せさせ給ひて、北の陣に小山を築かせ、櫨・楓の誠に色をうつくしうもみぢたるを植ゑさせ、紅葉の山と名づけて、終日に叡覽あるに猶飽き足らせ給はず。



などとあるものは、眞の「はぜ」の如くにも考へられて、今頃にいづれなりとも定め難し。幼き枝は漆の如く赤褐色を帶び、葉は奇數羽狀複葉にして、披針形をなせる小葉の先端は特に細長く、通常四―五雙よりなれり。五―六月頃圓錐花叢をなして小さき花を開き、後「はぜ」の實の如き果實を結べども、蠟成分少なし。

考證

或說にハゼノ木を切りて見れば、其こぐち外は白くして內の心黃なり、其黃なる心を弓には造るなり、物を染るにも用ふ、山に生たるを山ハゼといひて、里に生ひたるよりも性宜しといふといへり。（本居宣長）

## やまもも　楊梅

Myrica rubra S. et Z.

（楊梅科）

見るにことなきものの文字にかきてことことしきもの　覆盆子（イチゴ）・蘇草（ミツブルルヒ）・莢・胡桃・文蛤博士・

蟲后宮の櫨次尖楊梅いたどりはまして、虎の杖と書きたるとか。

と枕草紙に記されたる楊梅は、我國にては多く九州地方にありて、大なるものも高さ二―三丈を越ゆると稀なり。葉の形は倒卵狀長楕圓

形にして、長さ三—四寸許あり、質硬くして葉面に光澤あり。梢頭に綴りつける所は、唐か交讓木に似たり。四月頃黄白色の花を開く。

三月中の六日なれば、花は未だなごりあり、梅・桃・李の梢こそ折しり顔に色々なれ、雪の主人はなけれども
巷を忘れぬ花なれや、少將花の木に立ち寄りて、
桃李不言巷幾年、煙霞無跡世間稠、

故郷の花のものいふ世なりせば
いかにむかしのことを問はまし

此古き詩歌を口ずさみ給へば、鹿狐入道も折ふしあはれに覺えて、蠱染の袖をぞ濡しける

平家物語

雄花は長さ一寸許の穂狀をなし、雌花は大さ四—五分許の短穂にして、共に葉腋につけり。果實は夏熟す。一見蛇苺の實に似て、熟すれば黒紫色を呈し、味ひ甘酸なり。生食する外、鹽漬或は砂糖漬などとなし、葉の煎汁は漁網などを染むるに使用す。又樹は餘り大なることなければ庭木にも用ふ。

澤瀉の虫の摩羅り、磯打浪に袖濡す、柳といふ所に清かせ給ひたりけるに、梅・桃・李を
明植ゑて、九重の都に少し似たりければ、陸摩守忠度のかく、



都なる九重の内懸しくば
柳の御所を立よりてみよ

源平盛衰記

## 考證

楊梅は大島・伊豆諸島等自然生あり、果を結ぶ、島民之を食し、又其樹皮を以て、絹或は木綿を黄色に染むるの料とす、三宅・御倉・神津・新島等皆自然生あり、又皆染料に用ふ。
(伊豆六島植物誌略)

## ゆきやなぎ　珍珠花

又いはやなぎ・こごめばな・小米花・雪柳　〔薔薇科〕

Spiraea Thunbergii, Sieb.

珍珠花は山野に自生することあれども、其花の純白にして美しきよりまた多く庭前に植ゑらる。

いはやなぎ花色みれば山川の
水の泡とぞあやまたれける

近江御息女歌合

蕊の高さは四—五尺にして多く群がり生じ細長き小枝を分つこと繁し。葉は其形柳に似て長さ一—二寸あり、葉緣にはかすかに鋸齒を具ふ。春暖かくして胡蝶の出づる頃、新葉の未だ充分生育し終らざるに先ちて、白色の小花を簇生す。花の凋落する時、白瓣翩々として四方に飛び散る有樣は、恰も六花霏々として風に從つて下るが如し。

それは枠とれは木の根にこぼれけり
　小米の花の風にくだけて
枝折れば蝶のたつなり雪柳
咲きみちて散りなこはしぞ小米花
風に枝をふるひ落すか小米花
蕊かはば價何石こごめばな

古今東西集・采得
玉緒
獨楽
休雪
不明

## ゆづりは　交讓木　又ゆづるは　楪

Daphniphyllum macropodum, Mig.

（大戟科）

交讓木は多く庭木として苑圃に植ゑらるる灌木にして、高さ一—二丈に達す。葉は稍頭に群がり生じ、長さ五—六寸許ある長楕圓形にして葉質厚く、表面は滑かにして光澤あり、裏面は粉白色を帶ぶ。古き葉の一部は毎年新葉の發生するに從ひて交代するものなるが、其際葉柄の赤き部分を外方に示して、總の如く一齊に垂下せる有樣は、みばえ面白きものなり。清少納言も枕草紙に、

楪のいみじうふさやかにつやめきたるは、いと青う清げなるに、風ひかけず似るべくもあらず、蕊の赤うきらきらしう見えたるこそ、殿しけれど、をかしけれ。

と述べられたるも實に道理なり。交讓木の名も、蓋し其葉の新舊相互に交代するを以て名附けしものならん。雌雄異株にして、五月頃綠褐色の小花を簇生す。此樹の庭木として、風致あるはいふまでもなく、葉は昔より目出度き印として、歳首の慶賀、其他吉事の場合に用ひらる。

これぞこの春を迎ふるしるしとて
　ゆずるはかざし歸る山人
ゆずり葉や口にふくみて雉始め
楪の世阿彌まつりや骨かづら

現存六帖・如家
北角
風碧

中にも芹は御粥餅の中まで仕う來りぬ、しだ・ゆずり葉といへども匹なり、大豆・かどの魚心太の御まはりの下にしかれて、上はさらにて、下つかた怪しき民の口も、この薄草を

四季物語

こふも哀、神々しき來なるべし。

いつとなく酷な野にゆずるはの
　なほとこわかにさかゆへらなり　　松葉集

あどもへかあしくま山のゆずるはの
　ふふまるときに風吹かずかも　　萬葉集・讀人不知

年毎になつとはすれどゆつるはの
　かひこそなけれおひのしほみは　　夫木和歌鈔・信實

## ゆふがほ　壺蘆　又夕顔　（瓢蘆科）

Lagenria vulgaris, Ser.

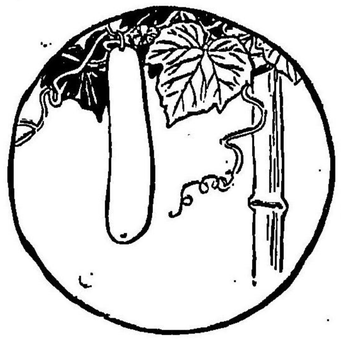
壺蘆は「へちま」の如き蔓草にして、莖は太くして長く伸ぶ。葉の形は胡瓜に似て掌狀に淺裂し、卷鬚は先端二つに分れて他物に絡みつけり。夏日軒下などに這ひまつはりて、大なる白色の花の咲き初むる所は、可憐にして又涼しき眺めなり。

山家がちなる軒のつまに　　咲きかかりたる花の名もを
えならずみえし夕顔の　　をり過ぎじとあだ人の



心の色は白顔の　　情をきたる昔の業の　三々

夕顔や須磨に咲くともとけら非　　鶴山・伏水曾我
夕顔は故のなく程のくらさかな　　昌賞
ゆふがほのしほむは人の知らぬなり　　僧蓼
　　野水



花の大さは直徑二三寸もありて瓣緣五裂し、夕刻より咲き始め翌朝に至りて萎むにより、朝顔に對して夕顔といへるか。枕草紙に、

夕顔は朝顔に似て昔ひつづけたるもをかしかりぬべき花のすがたにて、惜き身の有樣こそいと口惜しけれ。

とあり。花期過ぎて後長さ二尺餘もある大なる瓢果を結ぶ。

夕顔や秋はいろ〳〵の瓢かな　　曲洲
名はへちま夕顔に似てあはれなり　　長虹

果實は生食することを得、細かく裂き乾して乾瓢に製するものは專ら「まるゆふがほ」と稱する一品種にして、我國にて乾瓢の本場を以て有名なるは栃木縣なり。

## よし　蘆　又あし　葭・芦・葦

Phragmites communis, Trin.

（禾本科）

「あし」といへるも「よし」と呼べるも畢竟同じ物にて、かく二つの名の出來たるは、古き世にあしといふ言葉のいまはしくしていとふべきより、よしと言ひ代へたるに始まれりといふ。謠曲芦刈の一節に、

むつかしや難波の浦のよしあしも、昆しき海士はえぞしらぬ、唯世をわたる橋なれば
假の命つがんとて、蘆を取り運びて此市に、出づる蘆數におおし添へて召れよや、おおし
そへてめされよ。

とあり。又面白からずや。此草は河池沼などの片隅を喜びて、春月古き根より生ひ出づる草にして、高さ四-五尺より丈餘に達す。莖葉共に荻に似たれども、葉は幅廣くして短かし。八-九月頃莖の先端より大なる穂を出す。穂は芒荻などに比ぶれば遙に黑褐色を帶び、且花は此等の物よりも一般に大なり。莖は編みて簾に造る。世によしずと稱するもの即ち是なり。河風寒く吹きすさびて、老ひたる花穂の散り行く樣は、中中物淋しき景色なり。



しらさぎのつはさの風にちるあしの
ふふきもさむき冬の河づら　千蔭

津の國の難波のあしの結れぬれば
こと浦よりもきびしかりけり　眞淵

しら波のよすればなびくあしの根の
浮き世の中はみじかからなむ　古今六帖・貫之

蘆の花漁翁が宿のけぶりとぶ　蕉村
蘆間から風のひらふや拾小舟　千代女
鳴の子や古根底ほる芦の中　周東
蘆刈のうらを喰はせて碓かな　北角
芦の穂や頻なであげる夢ざかり　丈草

### 考證

時珍曰、按莖萇詩疏云、菼之初生曰葭、未秀曰蘆、長成曰萑、萑者偉大也、蘆者色蘆黑也、葭者嘉美也。又爾雅云、葭即蘆也、萑即蘆之成者。（本草綱目）

## よめな　雞兒腸　又うはぎ・おはぎ・のぎく　嫁菜・野菊

Aster indicus, L.

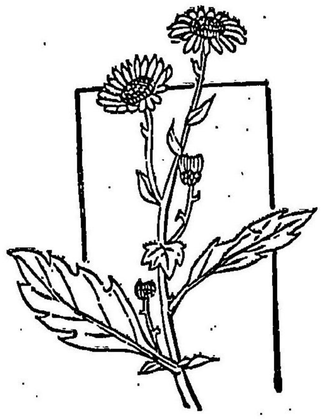
（菊科）

要もあらばつみてたげましさみの山
のゝへの宇波疑すぎにけらずや　　万葉集・人麿

けふは又雪間のおはぎつみまぜて
野邊の若菜の數やまさらん　　夫木和歌抄・信實

おはぎつむ春野をみればあをによし
奈良の都も暖ひにけり　　新撰六帖・光俊

などと古歌に出でたるを見れば、「よめな」を摘みて食用に供せしことは、古き御代より行はれしことなり。此草はいづこにても春の暖き野邊に他の若草と共に生ひ出づるものにして、莖の高さは一―二尺に達し、紫色を帶べり。葉は全く細なる鋸齒を具ふるものあり。頭狀花は共形紫苑の花に似てそれよりも小さく、梢の先端に一個づつ着き、淡紫色にして愛らしきものなり。周邊の舌狀花瓣は先端分裂せず、又「こんぎく」に似たる所あれども、花後冠毛を有せざる瘦果を結ぶにて粗なる鋸齒を具ふるものあり。



よりて、是と區別すべし。春の野に萌え出づる嫩苗は、先づ少女等の手先に迎へらるゝものにて、綠の野に少女と嫁菜の對照無邪氣にて面白し。誰か知らん、艷姿花を狀むく二八の乙女等も、やがては小町の恨みあるを。

干大根嫁菜をこふる戀へば　　芭蕉
酸のすぎた嫁菜の果は野菊かな　　許六
情ちる郷は蕾のはつ嫁菜　　勝延

幼き苗は煠きて浸物或は和物などに料理して味ふに、柔かにして味も甘し。其長じたるものを野菊といふ。

根を石にこれは河原の野菊かな　　龜翁
草刈の悪蓋はさむき野菊かな　　也有
角と石をひろひのこせし野菊かな　　尺草
重箱に花なき時の野菊かな　　其角

## 考證

野菜類七卷食經云、蒋蒿菜一名蔵蒿、和名於波岐、崔禹錫食經云、狀似艾草而香、作羹食之。（和名抄）

ウハギは今のヨメガハギなるを、貝原篤信は漢名蔵蒿を當たるは非なり、救荒本

草に雞兒腸とある當れり。(小野蘭山著本草啓蒙)

ウハギは今ヨメナとも野菊ともいふものなるべし、うとをと音かよへば、ウハギといふもオハギといふも同じ。(津木由豆流著万葉集考證)

ヨメナは古名をヨメガハギと稱へ、幾内の婦人はオハギ、近江にてはハゲ、諸國にてはノギクと呼ぶ、漢名は雞兒腸なり。(藤村世次郎著飲食界の植物誌)

## よもぎ　艾

又よもぎふ・きしもぐさ　蓬・蓬生

Artemisia vulgris, L. var. indica Maxim.

(菊科)

艾は早春多くの雜草に先ちて新芽を枯草の間に抽く。嫩苗の二三寸に伸びたるを摘み採り、草餅となして味ふに、香氣愛すべく味ひ亦口腹に適へり。古き世には專ら「ははこぐさ」を以て之に代へ、此草はさほど顧みられざりしにや、古歌には草枯々たる景色に詠み合せたるもの多し。

てる月の光はうとき蓬生の
　庭にみちたる虫の聲かな

聲れても忘れぬ月の影ぞとふ
　よもぎが庭の霜の深きに

現存六帖・後成女





いとど神さび物しづかなる傍に、住捨し草の戸あり、よもぎ・根笹軒をかこみ、屋根もり壁落ちて狐狸ふしどを得たり。

幻住庵記

秋風やよもぎの宿に吹ぬらん
　聲なつかしくなくきりぐす

蓬生のうづらは政屋の中に鳴
　蓬生に虫の鈴の古る金

古今六帖・讀人不知

北角

才丸

充分成育するときは、高さ二尺内外に達す。羽狀葉は質柔かにして、下面には灰白色の毛茸を密生し、甚だ芳香に富めり。夏月莖枝の頂端に多くの小頭狀花をつくれども、すべて蕚より變形せる冠毛を缺く。昔時は葉裏の白毛のみを集めてもぐさを製せしにより、一名を「さしもぐさ」ともいへり。

かくとだにえやは伊吹のさしもぐさ
　さしもしらじもゆる思ひを

後拾遺和歌集・實方

けふもまたかくや伊吹のさし艾
　さしも我のみ燃や渡らむ

新古今和歌集・和泉式部

しもつけやしめぢが原のさしもぐさ
　おのが思ひに身をやくらん

夫木和歌集・讀人不知

### 考證

今按ずるにヨモギは野にある時の名、モグサはもみ製したる時の名と云はば論なかるべし、和名抄にモグサ一名サシモグサ。（古今和歌六帖標註）

艾・サシモグサ・ヨモギ・ヨゴミ・モチグサ、艾を乾し採む時は葉は皆碎け粉となり、葉背の白毛のみ殘り綿の如し、これを熟艾といふ、和名モグサ、モグサに製するは自生短小を良とす、唐山にても蘄州に生ずるを上とす、蘄艾と名づく、蘄艾今漢種江州伊吹山の艾短小にして香氣甚し、故に其熟艾上品とす、因て世人伊吹もぐさを上品とすれどもしからず、今の伊吹艾は一名メマヨモギなり。（小野蘭山著本草綱目拾遺）

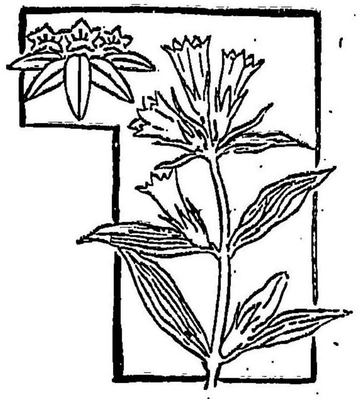
## りんだう　龍膽　又りうたん　健龍膽　（龍膽科）

Gentiana scabra, Bunge. var. Buergeri, Maxim.

龍膽の一名を笹龍膽といへるは、葉の形の竹の葉に似たる所より起れるものにて、所謂笹龍膽の紋所も、此植物より起りしものなり。晩秋に入りて、露深き草野に長さ一寸許ある紫碧色の華麗なる筒狀花の、莖頂に二―三個づつ咲き匂へる所は、哀れにして亦しほらしきものなり。

龍膽のとがりて强き匂ひかな　迷寸





莖の高さは七―八寸位より尺餘に達す。古來民間にては健胃劑として用ひ、日本藥局法にも亦健胃劑としての規定あり。古代には「りうたん」と呼びしものと見え古歌に左の如く出でたり。

我宿の花ふみしだくとりうたん
　野はなければやここにしも來る　　古今和歌集・友則

川上に今よりうたんあじろには
　まづもみぢばやよらんとすらん　　拾遺和歌集・讀人不知

龍膽のあすも咲からと樗へたり　　樗佛

刈萱・龍膽は枝ざしなどむつかしげなれど、こと花皆霜がれはてたるに、いと花やかなる色あひにて、さしいでたるいとをかし。　　枕草紙

## りやうぶ　令法　又はたつもり　（令法科）

Clethra barbinervis, S. et Z.

合法は「りやうば」とも亦「べうぶ」などともいふ。山地の雜木林中に自生多き落葉灌木にして、幹の高さ六—七尺位より丈餘に達す。互生葉は楕圓形にして先端尖り葉緣には細かき鋸齒を具へ、長さ二—三寸許あり。四—五月頃嫩葉の大さ六—七分位の時に採み取り、細かくきざみて飯に交へ炊きたるを合法飯といひ、味ひ香ばしきものなり。又湯に通して浸物などにも調理す。

里人や若菜やつむらんはたつもり　尖木和歌鈔・衣笠内大臣
外山も今は春めきにけり
ねやいらぬ外山の春のはたつもり　新撰六帖・光俊
菜にのみいでて人にしらるる
はたつもり積りし雪もきえぬれば　現存六帖・信實
しづがすさみにわかなむらん
今よりは木の芽も春のはたつもり　新撰六帖・知家
時來にけりと人や春ねん

夏月枝の先端より長さ四—五寸の花梗を二—三本づゝ出し、其の周りに帶黃色の小花を多く群がり着く。

考證

ハタツモリ説々あり、山茶科なりといへる説よろしとあれども、歌の意味より考ふればしかならず。（古今六帖標註）

リヤウブ淡名は救荒本草の山茶科にして、古歌には「ハタツモリ」と詠めり、其他ウマツツジ・ベツブ・ビヨウブナ・リヤウボウ等の異名あり。（榊村忠太郎著伏植界の植物誌）

## れんげつつじ　羊躑躅　又いはつつじ　（石南科）

Rhododendron Sinense, SW.

羊躑躅は其花の黃色を呈せるを以て、多くの躑躅と區別すべし。枕草紙にも、

花の色は濃からねど、咲く山吹には羊躑躅も異なることなけれど、おりもてみるぞとよまれたる、さすがにをかし。

とありて甚だ明かなり。花は四—五月頃新葉に先ちて枝の先端に開き、花形大なり。專ら山地に自生せる灌木にして、莖は「もちつつじ」の如く大ならず。葉の形は倒卵狀披針形にして、葉面にはあらく毛茸を有し、梢頭に多く叢生す。此種類は比較的珍らしきものなれば、有毒植物なれども花園庭上に植えて珍花とすべく、大なる花の群がりて咲ける樣は、八重かとも疑ゆ。

考證

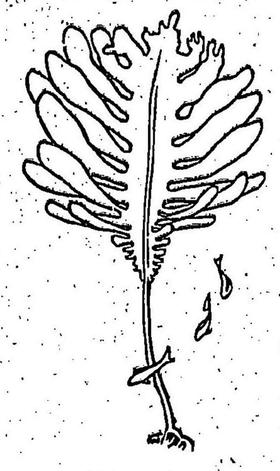
本草和名に、羊蹄は和名以波都々之、一名之呂都々之、又一名毛知都々之と出て、伴信友翁も又此の說に從はれしかど、支那にて羊蹄とあるは、其花の色の黃色なるものなる事は本草綱目によりて知られ、小野蘭山及松村博士も共に羊蹄をキッッジ又レンゲッッジなどといはれて、古き世にイハッッジと詠みしは、今のモチッッジなれば、羊蹄をイハッッジといふは、少しくあらざるに似たるが如し。

## わかめ　裙帶菜

又にきめ・若布・和布・飛布・海布　（褐色藻類）

Undaria pinnatifida, Sur.

裙帶菜は廣く全國の淺海に生ずる海藻にして、長さ通常二—三尺に達す。食料に供するため、毎年二—三月頃嫩葉を刈り採りて乾かし貯ふ。



しかのあまの軍布刈鹽やきいとまなみ
くしげの小櫛とりもみなくに

の和歌は萬葉集に出てたる石川少郎の詠にして、海邊の婦人のたゆまず勞働に從事せる光景、ありありと目前に見るが如し。莖の下端は根の如き形をなして海中の岩石に附着すれども、上部は扁平になりて中肋の如く、左右より羽狀に分裂せる葉狀部を出せり。全體綠褐色にして、昆布などに比ぶれば質薄くして柔かく、莖と葉狀部との境ひなる部分に、生殖器を生ず。日常味噌汁に混じ、或は酢の物などに調理して食す。我國にては阿波の產最も名高し。

汁の子もうみ出てよきわかめかな　貞德
かつきするあまの姿も若布かな　重勝
つの島のをとの和海藻は人のむた
あれたりしかどわがむたは和海藻　萬葉集・旅人不知

### 考證

ワカメは古名ニキメ之れを邇木米・邇岐米・和布・和海藻と書したり、一名ワカメ之れを稚海藻・和可米と書せり、時として單にメと稱し、海藻又は軍布の文字を用ゐたり、和漢三才圖繪が石蓴の文字を以て之れに擬せるは誤れり、近世に至り裙帶菜の文字を之れに充つれども其適否明ならず、而して近來俗に若布の文字を見ること往々是れあり。（植物學雜誌遠藤吉三郎）

## わすれぐさ　萱草　又くわんざう・しこのしこぐさ　忘草　（百合科）

Hemerocallis flava, L.

萱草は山野の草叢の間に自生せる宿根草にして早春舊根より群がり生ず。葉の形は白蕚（ヒヤウブ）に似たる所あれども、淡綠色にして光澤なく、質柔かにして表裏の區別明かなり。風に從つてよくなびく。暑き夏の野もいとはで長さ二―三尺の花莖を抽き、其先端に百合の如き花を開く。花の色は卵黄色を呈して麗はしき香氣あり。移して築山の岩陰などに植うる時は、確に夏の草花として目覺ましきものなり。されば物識りを以て名高き清少納言も、

前栽には萱草といふ草を、築垣ゆひていと多く植ゑたりける、花ぎはやかに直りて咲きたる、むべむべしき所の前栽にはよし。

といはれたり。又一名をしこのしこぐさといへるは、萬葉集に、

萱草わが下紐につけたれど
しこのしこ草ことにしありけり

とありしよりこのかたのことなりといふ。又忘草なる名にたよりて、巧に詠み出でし古歌少からず。

左中將うちにさむらふに、御息女所の御方より、わすれ草をなむ、是は何とかいふとて給へりければ中將、

わすれ草生ふる野邊とはみるらめど
こはしのぶなり後もたのまむ　　大和物語

となむありける。

すみよしと海士はいふとも長居すな
人わすれ草岸に生なる　　古今六帖・朝忠

わすれ草我身につまむと思ひしは
人の心に生ふるなりけり　　小町集

あれにける宿の軒端の忘草
かくしげれとはちぎらざりしを　　玉葉和歌集・伊勢大輔

### 考證

兼名苑云萱草一名忘憂漢語抄云和須禮久佐、今人好獸無憂草也。（和名抄）

ワスレグサは萬葉にも萱草とかき、かの忘憂草の意によみたり、且枕草子に六月ワスレグサの花の咲きたるよしありて萱草に疑ひなし。（加茂眞淵）

和須禮草といふは、文選藉康が養生論に萱草は憂を忘るといへるは、其花の美しきを見て我憂思をわするよしなりといへり、此說によりて出來たる名なるべし。（庖持馳澄著萬葉集品物解）

鬼をしことよめるは醜の偏をはぶきたるにて醜とかけるは正字なり、文字の非を略して通ずることは吾友狩谷望之が文字源流にあり、又しことは物をののしりてもいひ、自ら卑下してもいへる詞なり、萱草のことなり。（岸本由豆流著萬葉考證）

## われもかう　地楡　又吾亦紅　（薔薇科）

Sanguisorba officinalis, L.

地楡は諸州の草野にて特に陽地を喜びて生ずる草にして、細長き莖の高さは二三尺に達す。梢圓狀に密集せる紅色の穗狀花は、長さ五分乃至一寸許ありて、枝の先端につける所は、團子を串に挿せしが如く見ゆるより、又の名を「だんごばな」とも、いふ。かくて花は甚だ麗はしといふを得ざれども、比較的珍らしく、又其の貌の優

を有するを以て、又一名を「のこぎりばな」ともいへり。和歌俳諧にては、多く其名にことよせて面白く詠み出でたり。

なけやなけを花かれ葉のきりぐす　久安百首・安覽

われもかうこそ秋はをしけれ

野邊ごとに人も宿さぬわれもかう　夫木和歌抄・季道

こや今やうのむさのかぐさよ

武藏野の猪がれにみしわれもかう　狹衣日記

秋しも劣る匂ひなりけり　漫々

われもかう名もあき草に押れけり　村影

木の下や雨の蹴上のわれもかう　五册

吹く風は袖にくれけり地楡

しきものなれば、乘行法師も其著徒然草に、

秋の草は萩・薄・きちかう・女郎花・ふじばかま・しをに・われもかう・刈萱・龍膽・ぎく・黃菊・つたくず・刺蓼、いづれもいとたかからず、ささやかなるが、かきにしげらぬよし。

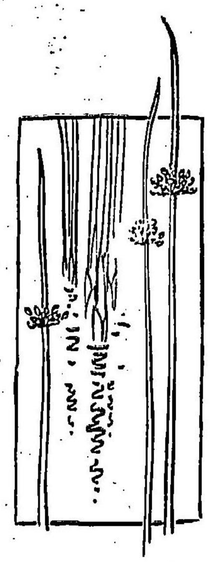
と述べられたり。葉は奇數羽狀複葉にして長楕圓形の小葉には眞に鋸の齒の如き鋸齒

此秋も吾亦紅よと見てすぎぬ　　白雄

## ゐ　蘭　又とうしんさうそろゐ　燈心草・細蘭草　（燈心草科）

Juncus effusus, L. var. decipiens, F. Buchen.

蘭は又「ほそゐ」ともいひて、各所の湿地に自生するものなれども、亦特に水田に栽培せらる水草なり。莖の高さは一尺より三―四尺に伸び、圓くして直立し、中に白髓を藏す。燈火に用ふる燈心は即ちこのものなり。根に近き所には褐色の包莖葉を着くれども



曙覽
紫泉
一水

も尋常葉はすべて是を缺けり。

燈心に葉のあらぬとぞ聞しけれ
車肌さへ知らで燈心哀れなり
燈心の花やら葉やら蛙東な

粟粒の如き小花は、花やら葉やら見分け難き程のものにて、夏日莖頂より二―三寸若くは七八寸下位の所に側生す。古來近江にては、琵琶湖の四周にある濕地にて、稻田に適せざる所に、此草を栽培して、近江表の原料に使用せり。

蘭の田植一年暦と見ゆるなり　　兼兆
植ゑあまる早稻に蘭田のくろみ哉　　一笠
燈心を曳いて逃水見出したり　　紫泉
蘭の花や泥によごるる春の雨　　鈍可
道の邊にそろゐ刈りほすむしろうち
さながら床にしてかとぞ見る

新撰六帖・鳥家

世俗にゐがらと稱して繩に造もるのは、燈心を拔き去りたるからなり。其成るべく小さきものを撰み、三―四株蒐めて水盤に植えたるは、淡白にして品よきものなり。

### 考　證

穗井田忠友氏の說に、菩薩池といふは此の水草(蘭)の名にて、みぞろいが池をつづめて呼なるべし。此池に蘭を生ず、これによりて名づけたるなり。新撰六帖の歌の詞とりて考れば、今の蟲むしろに造る蘭をいへるなり。と、

又隱岐の方言に、クロクワキの事をソロキともいへるより、ソロキをクロクワキに充つる說もあり。

## えのころぐさ　狗尾草

又えのこぐさ・犬子草・狸茅

（禾本科）

Setaria viridis, Beauv.

狗尾草は路傍・草野・田畑の畦畔などに自生せる雑草にして、茎は細長く高さ一尺内外あり。葉は其形竹の葉に似て小さく、夏の暑き日、茎頂に長さ一寸許ある黍の穂の如き、緑色の花穂をつく。秋風に豊かなる穂の輝く効らく有様は、子犬の喜狂して尾を振れる形に似たるより「えのころぐさ」とはいへるなり。

えの子草なのがころ〳〵穂に出て
秋をく露の玉やとるらん　　夫木和歌抄・為家

来る秋のころ〳〵しるやえの子草
ほゝ出て人しくはぬや犬子草　　宗鑑

一種花穂の黄金色なるは「きんえのころぐさ」と稱へて、彼れとは別物なれども、古へ
の歌文に「えのこぐさ」と記せるは、本よりかゝる區別あることとも思はれず、をしな



べていへるなるべし。又野遊びの子供等も採りて喜ぶものにて、扶桑拾葉集・東山
々家記に左の如き一節あり。

わらはべ・賤の女などの徒に若菜入れてもたるにぞ、道なる蓼（ヨモギ）などやうのものつみ
たる中に出々。

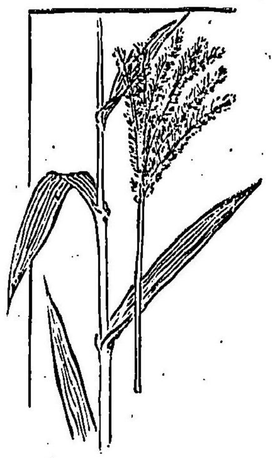
## をぎ　荻

又はまをぎ・沼荻

（禾本科）

Miscanthus sacchariflorus, Hack.

荻は一名を「をぎよし」或は「うみがや」などともいふ。水澤の地・海邊・原野等に生ず
る宿根草にして、其細根は泥中に延々し、毎節より地上茎を出す。茎は高さ四―五
尺に及び、其形狀葦に似たれども、彼より節間遙に短かく、其下部にては僅に一寸内外
なり。葉は互生し、長さ二―三尺に餘れる線形にして、淋しき秋の夜に、汐風に吹かれて
颯々たる音を發するなどは、物哀れなる景色なり。



萩の葉の戦ぐ音こそ秋風の
　人に知らるる始めなりけれ　　拾遺和歌集・貫之

猟の子が折焚すむて萩の聲
　鳴りやむは萩にとどくか夜の沙　　若狭　梨雲

秋萩の風うつろひて人を吹く　　摂良

九―十月頃芒に類似せる花穂を、莖の上端より叢生すれども、彼より遙に長大なれば、決してまぎらはしきことなし。

稀に観賞用として庭園に植ゑらるることなきにもあらず。莖は葦に等しく集めて籠に編むべく、又昔は簾の軸にも用ひたることあり。

うき秋の風の宿りとなるたびに
　植ゑてくやしや庭の萩原　　新撰和歌集・經高

いはぼ山の非をすずりにくませ、濱萩を筆の軸にきらせて、みちのく紙のあつこえたるに、かさねたらましかば、人麻呂の神も非左にぬまし、赤人の神と一座の句所をあらそひ給ふまじ。　　類柑文集

此の外濱萩を詠ひたる例を擧れば次の如し。

あら面白や候ふ、さてよしと言とは同じ草にて候ふか、きむ候、譬ば薄ともいひ、穂に出ねれば尾花ともいへるがごとし、扨は物の名も所によりてかはるよなふ、中々の事此言を伊勢人ははま萩といひ、なにには人はあしといふ。　　謠曲・芦刈

神風の伊勢の濱萩折りふせて
　たびねやすらん荒き濱邊に　　萬葉集・非擅越

汀なるしほあしにまがふ濱萩は
　よしとそ見ゆるよきの浦人　　神祇伯顯仲卿歌

よきの浦に一むらたてる濱萩の
　またたぐひなき戀もするかな　　大治三年住吉社歌合・能昌入道

## 考證

長明無明抄云、萬葉に伊勢のハマヲギとよめるは、萩にはあらず、葦を彼の國には濱萩といひならはせり云々、などあるより、此の方、言を伊勢にてハマヲギといふことを心得ふは誤なり、これ長明の頃よりふと出來たる俗說なり、濱言にまがへる濱萩は、言の如くみゆる如くよまれしにても、此の大治の頃までは一物とはせざりしを知るべし、されば唯濱に生たる萩を濱萩とはいふなり、これ濱の松を濱松といへる類なり。（非本山豆流著萬葉集考證）

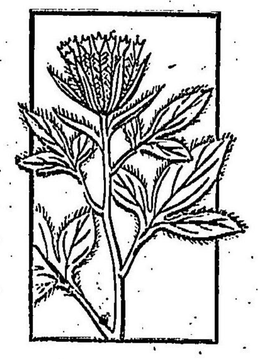
濱萩は只海濱に生ひたる萩をいひしのみにて、別種にてはあらざるべし。（沙彌滿誓）

## をけら　苍朮　又うけら朮

Atractylis ovata, Trunb.　（菊科）

「をけら」は山野に自生せる宿根草本にして莖の高さは通常二—三尺に達す。葉は互生し、其形狀には變化多くして、卵形をなせるもの、深裂して複葉の如き有樣をなせるもの、或は全く分裂して三個乃至七個の小葉よりなれるものなどあり。葉緣には甚だ細かき鋸齒を有す。頭狀花の形は薊（アザミ）の花に似て細長く、花瓣を包める魚骨狀の苞は其形頗る異樣にして、他の草花には見馴れざるものなり。花の色は黃白色を呈すれども開かざるに等しく、遂に又其凋みたる時をさへ氣附かざるばかりなり。されば千載和歌集に載せたる、俊賴朝臣の長歌の一節にも、

をけらが花の咲きながら　開けぬとのいぶせきに
よもの山邊にあくがれて　此面かのもにたちまじり







うつぶし染めの麻衣　花の袖にぬぎかへて
後の世をだに思へども　思ふ人々ほだしにて
ゆくべき方もまどはれぬ　云々

とあるは頗るよく實物に適ひて面白し。其根を乾したるものを苍朮と稱へて、今尙ほ漢方醫家にて多く用ふ。又昔餅の中に搗き交へしことあるにや、四季物語に次の如き詠あり。

他の國にはかかる例はなきにや、道儀の夜は、朮の餅つぐみの鳥などを燒き來り、御前の御まはりに來れば、どれも靈氣、疫病、やらひぬべき木文侍るとなん。

こひしけばそでもふるむを武藏野の　宇宗良（ウナヲ）が花の色につなゆめ
わがせこをあどかもいはむ武藏野の　うけらが花のときなきものを

萬葉集・武藏國歌

萬葉集・武藏國歌

### 考證

爾雅註云、朮似薊生山中、故亦名山薊也、和名乎介良。（和名抄）

ヲケラ又ツケラともいふ、此即ち西土の白朮なり、上古は只朮とのみいひしに、陶弘景より白朮赤朮の二種とせり、赤白二種共に山中におのれと生出しものよろし

き山大同類聚方に見えたれど今の本は僞撰なれば確に證とし難し、萬葉に武藏野のツケラが花とよみ、今も此國に至つて多く、且色につなゆめといへる歌の意を按るに、即ち今の白花のものと知らる、皇朝にては延寶・天和の頃まで舊根を白朮とも、新根を若朮ともせしが、それより後は嫩根を以て白朮とし、老根を以て若朮とせり、原より同種にして別物にあらざれば、何くも難あるまじきなり。但日本書紀以下延喜式等、白朮をあげて若朮をのせず、之によりて考れば、當時いまだ若朮の名を立てられざりしにや、千載集後頼朝臣の長歌に、此花は蒲花の如くにして、蒲花よりもまだ開かずして咲く物なるが故に、ひらけぬことのいぶせきにとよめるなり。

（扶代弘賢著古今要覽稿抄）

按ずるに宇家良といふが本よりの名にて、東語に宇家良といへるか、萬葉集中に宇家良と詠めるは、皆東歌なればなり、又宇家良が本にて、後に宇鏡和名抄の頃より訛りて、乎家良といへるか知らず。（鹿持雅澄著萬葉集品物解）

朮に若白あり、各自異種なり、而して本邦現てツケラの嫩根を若朮とし、宿根を白朮とす、其後舊說を改め、嫩根を白朮とし、宿根を若朮とす、然れども嫩宿を論ぜず皆若朮なり、强て分て二朮とせんや、而して和產の若朮云々和產の白朮云々として、若白二種のものとして記載せるは誤なり。（小野蘭山著本草啓蒙）

## をなもみ　菓耳　又めなもみ　（菊科）

Xanthium strumarium, L.

菓耳は全草「めなもみに」類似せる雜草にして隨所に生ひ出て、莖の高さは三-四尺位に伸ぶるものなり。葉の形は卵形にして、葉緣には大小不定の鋸齒を交へ、稍や長き葉柄を以て交互に莖に着けり。莖葉に含める汁液は、有毒なると同時に收斂劑として有效なり。

めなもみといふ草あり、くちばみにさされたる人、かの草をもみてつけぬればいゆとなむ、みしりておくべし。　徒然草

花は單性花にして、夏月梢上に開き、雄花は上部にありて、雌花は下位につけり。果實は大さ四-五分許ある銀杏の實の如き形にして、表面に細かき剛刺を密生せるを以て、よく衣服等に鉤着す。

## 考證

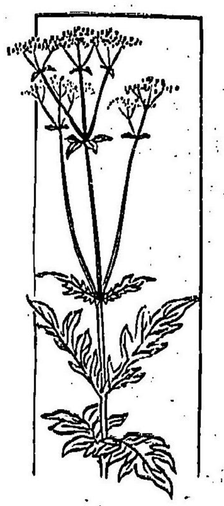
井上頼文氏述徒然草講義に、メナモミ稀薇草なり、本草に稀薇は蓋葉頗同苍耳とありて、俗には苍耳をメナモミといへり、苍耳の毒蛇に刺されたるを治す事は本草に苍耳治毒蛇並射工等傷嫩葉一握、研取汁、和温酒而泄之、將滓、厚罨傷所、とありと出でたれども、此中にて俗には苍耳をメナモミといへりとして、兼行法師の所謂メナモミを稀薇にあてたるは如何のものにや。本草に所謂苍耳は、同書の菜耳の部に頌曰時人謂三卷耳、爾雅謂之苍耳、虎雅謂之菜耳、皆以實得名也。とありて、苍耳は即ち菜耳にして、菜耳は即ちヲナモミなり。稀薇は本草にも菜耳とは全然別物となし、且ゆがきて食用に充つる事など記せども、毒蛇にさされたる時用ひて效あることなど、更に記されざるやうに覺ゆ。

## をみなへし　敗醤　又女郎花　（敗醤科）

Patrinia scabiosaefoia, Link.

ひよろ〳〵と猶露けしや女郎花　　蕉翁
牛にのる線御路すなをみなへし　　北角





花にして、秋の野を飾れる七種の中にても、わきて其數甚だ多し。

女郎花おほかる野邊に宿りせば　あやなく仇の名をやたてなむ　　古今和歌集・戀部

此男山の女郎花は、古歌にもよまれたる名草なり、是も一つは家づとなれば花一束を手折らんと、此女郎花の邊に立ちよれば、のう其花折り給ひそ、花の色はむせる粟の如し俗呼はつて女郎花とす、戯れに名をきいてだに借老をちぎるといへり。

手にとれば袖きへ香ふ女郎花　この白露にちらまくをしも　　萬葉集・讀人不知

實に露けき秋の野に、姿優さしく咲き匂へる女郎花は、頗る雅人の意を得たる草されば古來思を此草に寄せたる歌文は、其數甚だ多し。

女郎花露りの色を見るからに　露のわきける身こそ知られれ　　謠曲・女郎花

をみなへし匂へる秋の武藏野は　常よりも偏むつまじきかな　　貫之

かくうらやましくもて囃される女郎花は、如何なる植物なるかといふに、茎は甚だ細長くして高さ二三尺に達し、葉は節部に相對してつけり。葉の形には變化多けれども、概ね艾或は菊の葉に似て、鋸刻深く、複葉の如きものあり、又各裂片全く分離して、全然複葉となれるものもあり。花は實に蒸せる粟の如き小花にして、莖頂に群がり生じ、小さき鐘狀花冠の緣邊は五裂す。銷びたる庭に移して喜ぶ外、多く生花に飾りて玩ばれ、いづこまても愛せらるるものなり。

考證

新撰萬葉集云、女郎花、倭歌云女倍之、乎美那閇之也、今按花色如蒸粟。（和名抄）

女郎花は漢名敗醬といふ之なり、敗醬と名づけしは、此の花葉の臭醬の損ひたるが如しと本草にいへり、今試むるに然り、根も同臭あり。（貝原益軒著大和本草）

國文學に現れたる

# 植物考

終

明治四拾四年九月貳拾日印刷
明治四拾四年九月貳拾五日發行

定價金壹圓五拾錢

校閲者　白井光太郎
著者　松山亮藏
發行者　大葉久吉
東京市日本橋區本石町三丁目
國文學に現れたる
植物考
發行者　吉岡平助
大阪市東區備後町四丁目三十七番地
印刷者　青木弘
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
發兌　東京市日本橋區本石町三丁目
大阪市東區備後町四丁目
寶文館
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

不許複製

最正確にして最親切なる參考書

東京高等師範學校教授 理學博士 齋田功太郎
學習院教授 佐藤禮介 共著

# 參考植物學講義

上製背皮美本 全一冊 總計四百頁
押印刷繃帶

定價金三圓五十錢
小包料十二錢

本書は植物學研究者の好參考たらんことを期し斯界の泰斗なる齋田博士と斯道の研究に熱心にして學殖豐富なる佐藤教授との共力の下になるものにして記述の順序は專中學校教授細目に準據し普通植物學の要項を網羅しこれに詳細なる說明を加へ深遠なる理論につきても明晰に理解し易き機解釋を施されこれが實驗の方法をも說示し一體植物學全般に亘る學理及び應用の最新最近の知識を得せしめ總篇に記述せられたるもの而して卷中の挿畫は著者幾多の苦心を以て巧妙なる畫工をして特に實物に就いて寫生せしめこれを皆精緻なる西洋木版に彫刻したるもの其數實に約四百個の多きに及び且附錄には植物名學術語の和英對照表の索引を附したる等研究者の便を計り細心の注意を以てなれりされば有趣味なる植物學研究の好指針として時勢の要求に應ずる一大良書たるや必せり

東京日本橋木石町 振替東京二八〇番
大阪市東區備後町 振替大阪四三番
寶文館

寶文館發賣理科學書

東京高等師範學校教授 理學博士 齋田功太郎 佐藤禮介共著
● 參考植物學講義 上製背皮 全一冊 定價金貳圓五拾錢 小包料金拾貳錢

東京高等師範學校教授 理學博士 齋田功太郎著
● 實用植物學 上製背皮 全二冊 近刊

理學士 志田順 大島鎭治著
● 參考實驗物理學 上製 全一冊 定價金壹圓六拾錢 小包料金拾貳錢

第三高等女學校教授 理學士 森總之助著
● 最新物理學講義 上製 全壹冊 定價金壹圓七拾錢 小包料金拾貳錢

高等師範學校訓導 萬福直清著
● 小學校理科實驗法 博物篇 上製 全壹冊 定價金壹圓五拾錢 送料金拾貳錢

神奈川縣師範學校教授 鵜矢廣吉著
● 小學校理科實驗法 理化篇 上製 全壹冊 定價金壹圓貳拾錢 送料金八錢

文學博士 星野恒校閱 文學士 青木武助著
參考 **日本大歷史** 上製背皮全壹冊 定價金貳圓八拾錢 小包料金拾六錢

早稻田大學講師 東洋史專攻 文學士 高桑駒吉著
參考 **東洋大歷史** 上製美本全三冊 上卷金壹圓貳拾錢 小包料金八錢

早稻田大學講師 東洋史專攻 文學士 高桑駒吉著
**東洋歷史講話** 上製背皮全壹冊 **近刊**

前北京大學教習 西洋史專攻 文學士 坂本健一著
參考 **西洋大歷史** 上製背皮全壹冊 定價金貳圓參拾錢 小包料金拾貳錢

東京帝國大學文科大學助教授 文學士 村川堅固著
**西洋史便覽** 上製美本全壹冊 定價金壹圓貳拾錢 小包料金八錢

東京帝國大學文科大學助教授 文學士 村川堅固著
**村川西洋通史** 上製背皮全壹冊 **近刊**



京都帝國大學文科大學助教授 文學士 朝永三郎著
增訂 **哲學綱要** 上製美本全壹冊 定價金壹圓貳拾錢 小包料金八錢

京都帝國大學文科大學助教授 文學士 朝永三郎著
**歐洲近世哲學史** 上製美本全壹冊 **近刊**

東京帝國大學文科大學助教授 文學博士 福來友吉著
**心理學講義** 上製背皮全壹冊 定價金貳圓八拾錢 小包料金拾六錢

東京帝國大學文科大學助教授 文學博士 福來友吉著
**變態心理學講義** 上製背皮全壹冊 **近刊**

慶應義塾大學部講師 論理學專攻 文學士 今福忍著
增訂最新 **論理學要義** 上製背皮全壹冊 定價金壹圓八拾錢 小包料金拾貳錢

東京高等師範學校教授 文學士 吉田靜致著
**倫理學要義** 上製背皮全壹冊 定價金貳圓 小包料金拾貳錢

● 山田孝雄著 **日本文法論** 上製背皮全壹冊 定價金四圓五拾錢 小包料金拾六錢

● 東京府第四中學校長 深井鑑一郎校訂 **論語國字解** 袖珍上製全壹冊 定價金五拾五錢 小包料金六錢

● 東京府第四中學校長 深井鑑一郎校訂 **大學中庸國字解** 袖珍上製全壹冊 定價金參拾錢 小包料金四錢

● 東京府第四中學校長 深井鑑一郎校訂 **孟子國字解** 袖珍上製全壹冊 定價金七拾五錢 小包料金六錢

● 服部南郭先生講述 渡邊華石翁畫 **唐詩選國字解** 袖珍上製全壹冊 定價金九拾錢 小包料金八錢

● 東京府第四中學校長 深井鑑一郎著 **漢文學綱要** 袖珍上製全壹冊 定價金六拾五錢 小包料金八錢



教育實際社編纂

● 尋常小學 **修身新教授書** 和裝一、二年各定價五十錢 全六冊 送料八錢 以下逐刊

● 尋常小學 **讀本新教授書** 前期二年廿五錢、三年廿四錢、四年四十五錢、五年五十錢、六年六十錢（後期二年廿二錢、三年四十錢、四年五十錢、五年五十五錢）

● 尋常小學 **算術新教授書** 洋裝一、二、三、四、五、各五十五錢、送料八錢 全六冊 以下逐刊

● 尋常小學 **日本歷史新教授書** 和裝五年用定價五十五錢 六年用定價金四拾錢 全二冊 送料各八錢

● 高等小學 **日本歷史新教授書** 一年用定價五十五錢 二年用送料八錢 近刊

● 尋常小學 **地理新教授書** 和裝五年用定價一拾五錢 六年用定價四拾錢 全二冊 送料各八錢

● 高等小學 **地理新教授書** 一年用一年六拾錢 二年五拾五錢 二年用送料八錢

東京高等師範學校訓導 馬淵冷佑編
●尋常小學讀本參考 上製 全一冊 定價金壹圓八拾錢 小包料金拾貳錢

青森縣師範學校主事 佐々木清之丞編
●尋常小學讀本に關する研究 上製 全一冊 定價金壹圓 小包料金八錢

米國教育學博士 西山惣治著
●兒童中心主義攻究的新教授法 上製 全一冊 定價金六拾錢 小包料金八錢

藤井利譽 宇田四郎共著
●尋常小學語法教授細案 上製 全一冊 定價金九拾錢 小包料金八錢

文部省視學官 小泉又一序 上田久吉著
●保護教育 上製 全一冊 定價金七拾錢 小包料金八錢

京都府女子師範學校教諭 增澤長吉著
●日本現代史綱 上製 全一冊 定價金壹圓貳拾錢 小包料金八錢



文部省調査
●小學校作法教授要項 洋裝 全一冊 賣價金八錢 送料一冊二錢 七冊八錢 十六冊十六錢 廿五冊十二錢

教育實際社編纂
●文部省調査參照國定修身書準據小學作法教授細目 洋裝 全一冊 定價金六拾錢 小包料金八錢

相島龜三郎著
●文部省調査參照國定修身書準據小學作法教授書 上製 全一冊 壹圓五十錢 小包料拾貳錢

東京高等師範學校訓導 相島龜三郎著
●國定修身書に關聯せる作法教授書 和裝 全二冊 定價金五拾錢 送料金六錢

寶文館編輯所編纂
●小學校に於ける作法並に教授要目 和裝 全一冊 定價金貳拾五錢 送料金六錢

東京高等師範學校訓導 阿部潔著
●兒童の休憩と學習との關係 上製 全一冊 定價金九拾錢 小包料金八錢

●教育勅語資料 **範例大鑑** 内藤慶助著 背皮上製 全壹冊 定價金貳圓參拾錢 小包料金拾貳錢

●戊申詔書義解 山田孝雄著 洋裝 全壹冊 定價金貳拾錢 送料金四錢

●戊申詔書を中心としたる **講堂訓話** 教育實際社編纂 洋裝 全壹冊 定價金七拾錢 送料金八錢

●大阪市視學 意志修養 **講堂訓話** 楠品次序 泉原龜藏著 洋裝 全壹冊 定價金貳拾八錢 郵稅金六錢

●大阪市視學 少年立志 **講堂訓話** 楠品次序 泉原龜藏著 洋裝 全壹冊 定價金四拾五錢 郵稅金六錢

●内外 **教訓物語** 東京高等師範學校訓導 馬淵冷佑著 上天之卷製 定價金壹圓八拾錢 郵稅金拾貳錢



●實驗 **學校管理法精義** 廣島高等師範學校教授 渡邊辰次郎著 上一冊製 定價金貳圓五拾錢 小包料金拾貳錢

●小學校に於ける **美感的施設** 東京麹町小學校長 竹原久之助著 上一冊製 定價金壹圓 小包料金八錢

小學校に於ける **實用的施設及教材** 東京麹町小學校長 竹原久之助著 上一冊製 定價金貳圓 小包料金拾貳錢

小學校に於ける **特別教示** 東京麹町小學校長 竹原久之助著 上一冊製 定價金八拾五錢 送料金八錢

**學校及教師と圖書館** 東京市教育課長 戸野周二郎著 上一冊製 定價金八拾五錢 小包料金八錢

全國 **優良小學校施設狀況** 文部省認許 教育實際社編 上壹冊製 定價金壹圓五拾錢 小包料金拾貳錢

教育實際社編纂
勅語準據
**小學校訓示教案**
上製全壹冊　定價金九拾錢　送料金八錢

教育實際社編纂
**小學校揭示資料**
上製全壹冊　定價金壹圓五拾錢　小包料金拾貳錢

長崎縣師範學校主事　加納友市　美島近一郎著
**國民教育資料**
上製全壹冊　定價金貳圓　送料金拾貳錢

青森縣師範學校主事　佐々木清之丞著
日曆體排列
**小學校教材補充資料**
上製全壹冊　定價金壹圓　小包送料金八錢

青森縣師範學校附屬小學校教務研究會編
小學校の實際に關する適切なる諸問題の研究
洋製全壹冊　定價金壹圓四拾錢　小包料金拾貳錢

文部省前參事官　松本順吉校閲　文部省普通學務局員　澁谷德三郎編纂
改正
**小學校法規要義**
上製全壹冊　定價金壹圓　送料金拾貳錢



長崎縣師範學校教諭兼主事　加納友市著
**六箇年單級小學校**
上製美本全壹冊　定價金壹圓貳拾錢　送料金八錢

長崎師範學校主事　加納友市著
**複式教授の理論と實際**
上製全一冊　定價金壹圓貳拾錢　小包料金拾貳錢

東京高等師範學校教諭　樋口長市　立石仙六　共著
**自習法**並これと聯關せる**教授法**
上製全一冊　定價金六拾錢　郵税金八錢

山口酉三郎　宮下丑太郎　福田作太郎　共著
小學校統一的
**體操教授の理論及實際**
上製全壹冊　定價金壹圓參拾錢　送料金八錢

前文部省國定教科書編纂委員　横山德次郎著
小學
**科外教材及教法**
上製全一冊　定價金壹圓四拾錢　小包料金拾貳錢

文部省普通學務員局長　松村茂助校閲　澁谷德三郎著
**視學要訣**
上製全壹冊　定價金壹圓　送料金八錢

東京高等師範學校教授 棚橋源太郎 岡山秀吉共著
**手工科教授書** 上製 全壹冊 定價金貳圓 郵稅金拾貳錢

東京高等師範學校教授 棚橋源太郎 岡山秀吉共著
**手工科教授細案** 洋裝 全壹冊 定價金六拾錢 郵稅金八錢

東京高等師範學校教授 岡山秀吉著 文部省檢定濟
小學校に於ける**手工教授の理論及實際** 上製 全壹冊 定價金壹圓廿錢 送料金八錢

東京高等師範學校教授 岡山秀吉著 文部省檢定濟
**手工科教材及教授法** 上製 全壹冊 定價金六拾錢 送料金八錢

京都市聚樂小學校長 廣田虎之助著
**聚樂式算術教授法** 上卷金壹圓四拾錢 下卷金貳圓 上製 全二冊 送料金八錢

伯爵 大隈重信著
**國民讀本** 和裝美本 全壹冊 定價金四拾五錢 郵稅金八錢



文部省視學官 吉岡郷甫 塚本小治郎 合作
**物語 菊の下水** 和裝 全壹冊 定價金參拾五錢 郵稅金六錢

淺田小兒科病院長 ドクトル 淺田繁太郎氏著
**通俗 子供の病氣と其手當** 洋裝 全壹冊 定價金壹圓 郵稅金八錢

醫學博士 長與稱吉 校 山木五郎 著
**通俗 胃腸病養生法** 洋裝 全二冊 一篇金五拾五錢 二篇金六拾錢 郵稅各金六錢

山縣眼科病院長 醫學士 山縣正雄 校閱 光藤介著
**通俗 眼の養生法** 洋裝石版畫挿入 定價金參拾五錢 郵稅金六錢

和洋裁縫女學長 珈越千代子著
**和洋裁縫教本** 和服編二冊 和裝美本 定價各金五拾錢 郵稅各金六錢

島根縣女子師範學校教諭 綿織竹香著
**最新 小學校裁縫教授法** 和裝 全一冊 定價金五拾五錢 送料金六錢

寶文館編輯所編纂
最新商業辭典 上一冊製 定價金貳圓貳拾錢 送料金拾貳錢

寶文館編輯所編纂
訂正增補小學各科教材大辭典 背皮一冊 定價金參圓 小包料金拾六錢

歷史及地理講習會編纂
日本歷史辭典 上一冊製 定價金貳圓 小包料拾貳錢

文學士阪本健一著
社會文學辭典 上一冊製 定價金壹圓五拾錢 小包料金拾錢

法學士田邊慶彌著
法律經濟辭典 上一冊製 定價金壹圓 郵稅金八錢

文學士阪本健一著
訂增外國人名地名辭典 上一冊製 定價金壹圓貳拾錢 郵稅金八錢



長澤龜之助著
再訂正解法適用數學辭書 上一冊製 定價金壹圓五拾錢 送料金拾貳錢

長澤龜之助著
再版問題解法代數學辭典 上一冊製 定價金壹圓五拾錢 送料金拾貳錢

長澤龜之助著
訂正增補再版問題解法幾何學辭典 上一冊製 定價金壹圓 送料金八錢

長澤龜之助撰著
問題解法續幾何學辭典 上一冊製 定價金壹圓五拾錢 送料金八錢

長澤龜之助撰著
問題解法三角法辭典 上一冊製 定價金壹圓五拾錢 送料金拾貳錢

長澤龜之助撰著
問題解法算術辭典 上一冊製 定價金貳圓五拾錢 小包料金拾六錢

文學士 朝氷三十郎著 訂增
**哲學辭典**
上製全一冊 定價金貳圓參拾錢 郵稅金拾五錢

文學士 內海弘藏著
**讀書作文辭典**
上製全一冊 定價金壹圓五拾錢 小包料金拾五錢

文學士 內海弘藏著
**新國語辭典**
上製全一冊 定價金壹圓五拾錢 小包料金拾貳錢

文學士 內海弘藏著
**新漢和辭典**
上製全一冊 定價金壹圓五拾錢 小包料金拾貳錢

文學博士 三島毅監修 池田蘆洲著 增補
**故事熟語辭典**
上製全一冊 定價金貳圓 小包料金拾五錢

文部省圖書課員 高野辰之 和田信二郎共著 字音國語
**假名遣辭典**
上製全一冊 定價金八拾錢 小包料金八錢



法學博士 福田德三原著 商學士 阪西由藏譯
**日本經濟史論**
上製背皮全壹冊 定價金壹圓五拾錢 小包料金八錢

神戶高等商業學校教授 津村秀松著
**經濟學大意**
上製美本全壹冊 定價金七拾五錢 小包料金八錢

長崎高等商業學校教授 法學士 山內正瞭著 英文
**經濟綱要**
上製美本全壹冊 定價金八拾錢 小包料金八錢

慶應義塾大學教授 法學博士 堀江歸一著
**財政學**
上製背皮全貳冊 定價金參圓 小包料金拾貳錢

法學士 藤井宇平著 通俗合理
**人生及經濟**
上製美本全壹冊 定價金六拾錢 小包料金八錢

京都帝國大學法科大學教授 法學博士 織田萬著
**行政法講義**
上製全壹冊 定價金壹圓五拾錢 上製金參拾錢增 小包料金拾六錢

元横濱正金銀行員 チャータード銀行員 小林綠著
●實踐國際爲替 上製脊皮全壹冊 定價金參圓五拾錢 小包料金拾貳錢

在英京日本銀行派出員 商學士 水野重也著
●最新外國爲替 上製美本全壹冊 定價金壹圓貳拾錢 小包料金八錢

長崎高等商業學校教授 商學士 平尾丹治著
●最新商業通義 上製全壹冊 定價金壹圓五拾錢 特製金貳拾五錢增 小包料金拾貳錢

法學博士 跡部定治郎 法學博士 毛戸勝元 共譯
●國際民商法論 上製脊皮全貳冊 定價金各貳圓 小包料金拾六錢

京都帝國大學法科大學教授 法學博士 織田萬著
●訂正法學通論 上製全壹冊 特製金壹圓七拾五錢 小包料金八錢

前神戸高等商業學校教授 小野十郎著
●新編商業算術 上製美本全壹冊 定價金壹圓八拾錢 小包料金拾貳錢

警文館發兌法制經濟書

神戸高等商業學校教授 津村秀松著
●國民經濟學原論 上製脊皮全貳冊 上卷金貳圓貳拾五錢 下卷金貳圓五拾錢 小包料各金拾貳錢

ビールソン著 法學士 河田嗣郎解說
●價値論 上製全壹冊 定價金壹圓五拾錢 小包料金八錢

遞信省郵便貯金局長 法學士 下村宏著
●簡易生命保險と年金事業 上製全壹冊 近刊

津村秀松編輯 大西猪之助著
●帝國主義論 洋製全一冊 定價金壹圓貳拾錢 小包料金拾貳錢

日本郵船會社監督課勤務 寺島成信著
●對外商工策 上製全一冊 定價金六拾五錢 郵稅金八錢

京都帝國大學教授 法學博士 市村光惠著
●改版行政法原理 上製脊皮全壹冊 定價金參圓五拾錢 小包料金拾貳錢

# 一時局必讀之書

東京高等商業學校教授 法學博士 關一著

## 工業政策

上製背皮美本金貳冊
菊判約壹千三百頁上卷
定價金貳圓參拾錢
小包料金拾貳錢
下卷近刊

神戸商等商業學校教授 津村秀松著

## 商業政策

上製背皮美本金貳冊
紙數壹千三百頁上卷
定價金貳圓參拾錢
小包料金拾貳錢
下卷近刊

●面目一新せる我が國の工業は世界の大勢に伴ひ解決を要すべき幾多の重大問題を有す
●近く帝國議會に於て討議せられたる工場法案の如きは其の一にすぎざるべしあらず
●本書は關博士が豐富なる學殖と縝密とを以て工業政策の大綱を叙述せられたるものなり
●即ち博士一家の識見は書中至る所に披瀝せられ學理と實際問題との關係を明かにせられたり
●且つ當面の問題の解決に資するところ最も明快を極め文章また暢達解せしむるに足る
●されば學者實務家たるとを問はず必讀すべきの書たるや縷々を要せざるべし敢て臨す

●條約改正の大業一度び結了せしと雖も是れ法權の恢復たりしのみ稅權の恢復未だ完からず
●而して今やこの改訂の機は眼前に迫りて國民みな其の完璧を期せざるものなし
●津村教授時勢に感あり多年專攻せる研究の結果を叙述してこゝに本書を公にす
●所論の正確觀察の銳利これ教授特得の長所加之文章流麗其の時する所を知らしめて餘蘊なし
●教授既に國民經濟學原論を著すや學界の名著として好評嘖々洛陽の紙價爲めに貴かりき
●今又此の新著あり必ずや朝野の識者に資する所の影響前著が與へし影響より厚一層なるべし

東京振替貯金口座 日本橋東京市本町三丁目 大阪振替貯金口座 大阪市東區備後町四丁目 寶文館

300527-000-8

RA255-116

国文学に現はれたる植物考

松山亮蔵／著，白井光太郎／校閲

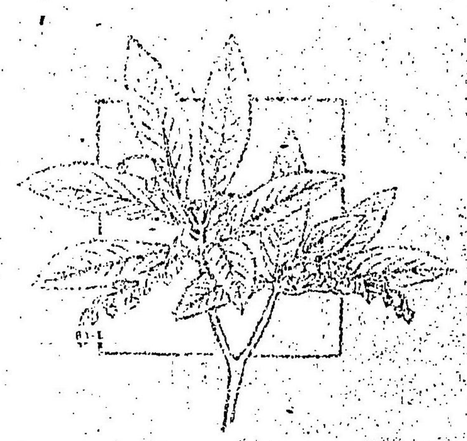
1911

CAQ-0003

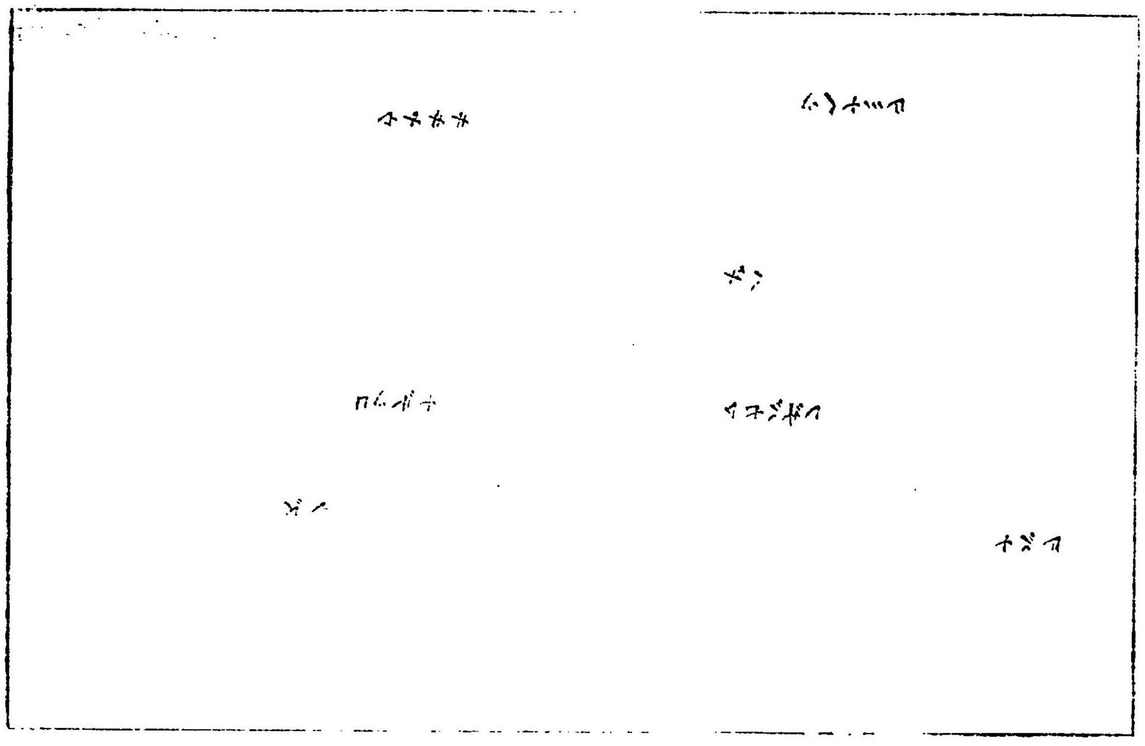
# 植物考

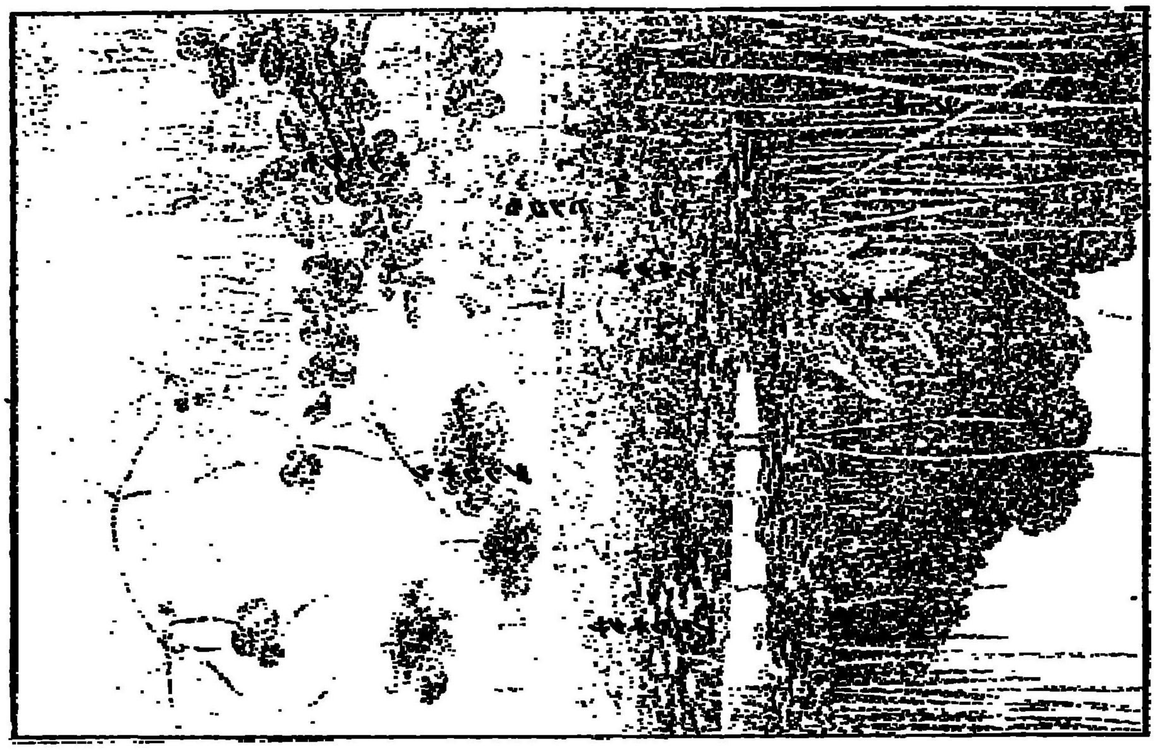
全


理學博士
白井光太郎 關根郎 松山藏苑著


東京・大阪
藏館文書版





# 一時局必讀之書一

●面目一新せる我が國の工業は尚世界の大勢に伴ひ解決を要すべき幾多の重大問題を有す
●近く帝國議會に於て附議せられたる工場法案の如きは其の一たるずんばあらず
●本書は關博士が豐富なる學殖と練達とを以て工業政策の大綱を叙述せられたるものなり
●即ち博士一家の識見は書中至る所に披瀝せられ學理と實際問題との關係を明かにせられたり
●且つ當面の問題の解決に資するところ最も明快を極め文章また暢達易解せしむるに足る
●されば學者實務家たるを問はず必讀すべきの著たるや喋々を要せざるべし敢て敲ず

東京高等商業學校教授 法學博士 關一著

## 工業政策

上製背皮美本全貳冊
數約壹千三百頁上卷
定價金貳圓參拾錢
小包料金拾貳錢
下卷近刊

神戸高等商業學校教授 津村秀松著

## 商業政策

上製背皮美本全貳冊
紙數壹千三百頁上卷
定價金貳圓參拾錢
小包料金拾貳錢
下卷近刊

●條約改正の大業一度び結了せしと雖も見れ法權の恢復たりしのみ稅權の恢復未だ完からず
●而して今やとの改訂の機は眼前に迫りて國民みな其の完璧を虛遺せざるものなし
●津村教授時勢に感あり多年專攻せる研究の結果を叙述してこゝに本書を公にす
●所論の正確觀察の銳利これ教授特得の長所加之文章流暢其の歸する所を知らしめて餘蘊なし
●次授港に國民經濟學原論を著すや學界の名著として好評嘖々洛陽の紙價忽めに貴かりき
●今又此の新著あり必ずや割下の國論に資する所の影響前著が與へし影響より將一層なるべし

東京振替 日本橋區東京市本石町三丁目八〇二
大阪振替 大阪市東區備後町四丁目三

寶文館